
ロスト・チルドレン

南 晶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ロスト・チルドレン

【Nコード】

N1427Y

【作者名】

南 晶

【あらすじ】

不倫中のOL美由紀は、偶然、初めて付き合った彼氏の準一に再会する。

8年振りに会った彼は、義父から受けた虐待の為に声が出なくなっていた。

夢も希望もないOLの美由紀と、トラウマを抱えた工場派遣社員の準一。

社会の底辺で彷徨っていた二人は再び歩き出そうとするのだが・・・？

再会 1

クリスマスも近い11月の半ば。
事務所の壁時計の針が5時半を指したその瞬間、あたしはデスクから勢い良く立ち上がった。

「お先に失礼しますっ！」

これから残業モードに入ろうと、のんびり席を立ってコーヒーを入れ始めた同僚達を尻目に、あたしはそう言い放ってデスクの中からバッグを掴んで引っ張り出す。

零細企業の給料計算が仕事というしがないOLのあたしが、たった一時間残業したところで会社の利益に繋がることはない。
寧ろ、無駄な経費だ。

明日できることは今日しないのが、あたしのライフスタイルだった。
しかも、今日は待ちに待った金曜の夜。
あたしには大切な約束がある。

「美由紀^{みゆき}、やけに急いでんじゃん？何かいいことあるわけ？」

隣のデスクでパソコンと睨めっこしていた同僚、田中裕美^{たなかゆみ}がチラリと目だけ動かしてあたしを見た。
彼女の鋭い視線に、あたしはドキっとするも平静を装って笑顔を作った。

「何にもありませんよーだ。期待してもムダだよ。男でもできたらユミにも紹介するって。」

「じゃ、何で週末の仕事上がりに急いでんの？」

ニヤリと笑いながら意地悪く突っ込んでくるユミを、あたしは軽くあしらう。

「できる女は残業しないんだよ。あたしは会社が嫌いなの。じゃ、また月曜日にね。」

まだ訝しげにあたしの背中を見つめるユミの視線を無視して、あたしはオフィスを飛び出した。

この会社に入社して早5年。

地元の商業高校卒業と同時に入社した地元零細企業は、毎月同じことの繰り返しで、もう既に飽き飽きしている。

給料計算という仕事は、時々社員の入れ替わりがある他は決まった事を締め日までに行えばそれで事足りた。

会社が高卒の若い女の子に大した責任を負わせる筈もなかったが、あたしも仕事に情熱など感じた事などない。

ただ生活の為に割り切って、業務を淡々とこなす毎日だ。

23才にして人生に夢も希望もないあたしが、死ぬほど心待ちにしていることが一つだけあった。

それが毎週一回だけ訪れる金曜の夜。

まさに今夜だ。

チョコレートブラウンの小さな軽自動車に乗り込み、あたしは会社の駐車場を飛び出した。

まだ6時前だというのに日は完全に落ちて、街灯があちこちにつき

始める。

晩秋の風が肌身に染みて、人肌恋しい季節の到来を感じる。
薄暗い夕闇の中、あたしは今夜の逢瀬に思いを馳せる。

そうだ、お酒とつまみでも買っていこう。

アイスクリームと甘いチョコレートも。

お腹が減った時のために冷凍のピザでも用意しよっかな。

明日の朝食べるクロワッサンとコーヒーも・・・。

遠足の用意をする子供みたいに、あたしの胸は楽しみで高鳴っている。

今夜の事は楽しみだけど、こんな風に考えながら買い物したりするのも、あたしは好きだった。

遠足当日より前日までの方が楽しいのと同じ心境だ。

大好きな人の為に何かを用意するって、こんなに幸せなことなんだ。あたしは道路沿いにスーパーを発見すると、車をそこに滑り込ませた。

仕事帰りの主婦達で混み合うスーパーの駐車場をしばらくウロウロした後、やっと見つけた軽専用の一角に車をバックで入れた。

何とか入ったものの、真っ直ぐになっていないので運転席のドアが隣に車に接触しそうで開かない。

運転が下手な私には日常茶飯事のことなので、助手席側から降りようとお尻をずらした。

その時。

とんでもない光景があたしの目の前に繰り広げられた。

車の前をゆっくりと通り過ぎていく子供連れの夫婦。

赤ちゃんを抱いた上品な若奥様が5歳くらいの男の子の手を引いて

いる。

それに寄り添うように歩いていく買い物袋を一杯抱えたハンサムな男性。

甘いマスクが美しい妻を見つめて、柔らかな微笑みを浮かべている。よくある微笑ましい風景だ。

ある一点を除いては。

私は車の中で硬直したまま、目の前を通り過ぎていく夫婦をバカみたいに見送った。

そのハンサムな旦那こそ、あたしが今夜遭うことになっていた筈の男性だったのだ。

再会 2

件名 予定変更

本文 ゴメン、今日会えない。嫁が突然子供と一緒に帰ってきた。また連絡する。

彼からこんなメールが来たのは、約束の時間もとくに過ぎた夜9時頃だった。

行く当てがなくなったあたしは、駅前のコイン駐車場に車を止めたまま、ボンヤリと彼からの連絡が来るのを待っていたのだ。

今頃返信してくるとは、あたしと会うことなんて完全に忘れていたらしい。

直接マンションに行つて、嫁と鉢合わせしたらどーするつもりだったんだか。

幸か不幸か、あたしはその前に地雷を踏んで勝手に自爆した。神様の計らいと感謝すべきなんだろうか。

文句を言える立場でないのは分かつてる。

おバカなあたしでも、身の程はわかまえてるつもりだ。

世に言う不倫の関係で、妻の妊娠中の里帰りに隙について幸せな家庭にヒビを入れてるのはあたしなんだ。

彼の家庭を壊すつもりもないし、奥さんに何の恨みがあるわけでもない。

むしろ謝りたいくらいだ。

でも、だからと言ってこの関係を止める勇気はあたしにはなかった。

一つは彼が好き。

イケメンで優しく、セックスの相性もバツグンで、何と云ってもお金を持っている。

彼は大手商社の営業マンで、今まで付き合った男でこんなに金払いがいいのは初めてだった。

この不景気の時代、本物の恋人に割り勘させる男が主流だったのに、さすが年上の貫禄だ。

彼の車でお姫様みたいに連れ回されて、ラブホじゃないホテルにエスコートして貰うのは私の至福の時だった。

もう一つは、彼の他にあたしには頼るものがないこと。

夢も希望も将来もない、しがないOLが唯一心の支えにしているのは彼と会える金曜の夜だけだった。

それを奪われたら、あたしに何が残るだろう。
もはや生きてる意味さえ無くなるような気がした。

・・・いいじゃん。

奥さんは彼と子供と安定した将来が約束されてんだから。
週一回くらい貸してくれてもいいじゃん。

ちゃんと返すから、夢くらい見せてくれてもいいじゃない・・・。

気が付いたらポロポロと涙が零れ落ちていた。

泣いたのなんて久し振りだ。

クールで現実主義のあたしにも、こんな感情が残ってたのは自分でも驚きだった。

あたしはティッシュを掴み取り、ズズッと鼻をかんでから、ハンド
ルに引っ掛けてあるゴミ袋に押し込む。

ああもう！

どうつけてくれるのよ、この落とし前！

ブツクサ毒を吐きながら勢い良くドアを開けると、あたしは夜の街に向かつて歩き始めた。

晩秋と言うより、もはや冬に近い寒さだった。

しけた田舎の駅前には軒並み店仕舞いしていて、木枯らしでシャッターがガタガタ音を立てているのが尚、物悲しい。

この自称繁華街で唯一賑わっている場所が、ロータリーの反対側に位置するマクドナルドだ。

家に帰っても、外泊の予定だったあたしに晩御飯は用意されていない。

無意識に足が向かったのは、人恋しさか、空腹ゆえか……。とにかく、あたしは明かりを目指す蛾の如く、ノロノロとマクドナルドに向かつて歩いていった。

「フィレオフィッシュセット、ドリンクはホットコーヒーで。」

横柄な態度で注文したあたしに、カウンターの店員は笑顔すら見せて素早くトレイを用意し始めた。

さすがスマイル0円だ。

高校生だろうか。

ショートカットの爽やかな女の子だった。

すっぴんの肌がピンク色でツヤツヤしている。

たった5年前まではあたしだって高校生だったのに、どうして今、こんなにどん底なんだろう。

どこで間違って、こんな女の子になっちゃったんだろう。

溜息をついた時、後ろに人がいるのに気が付いて、あたしは慌てて場所を譲った。

レジの横で待つのはマクドナルドの常識だ。

後ろの人は待っていたかのように、スッと前に出る。

大柄な男性だ。

モスグリーンの上下揃いの汚れた作業着から、鼻にツンとくる車のオイルの匂いがした。

伸ばしっ放しの黒髪は、何年も彼女がいない事を物語っているようだ。

典型的な日本のブルーカラーの样相に、ハイソな生活を夢見るあたしには何の興味も湧かなかった。

それなのにあたしが思わず彼を見つめてしまったのは、彼と店員とのやり取りが異様だったからだ。

彼は黙ったまま、カウンターに置いてあるメニューを指差して店員に見せた。

さっきのショートカットの高校生は、キョトンとした顔で首を傾げる。

男性は訴えるような、悲しげな表情で、メニューを指さしたまま店員を見つめた。

「あ、テリヤキバーガー？セットでいいですか？」

ようやく理解してくれた店員に、彼はホッとした顔で首を縦に振った。

だが、次の難関が彼を待っていた。

「お持ち帰りですか？こちらでお召し上がりですか？」

相変わらず黙ったまま、彼は指で床を指した。

ここで食べたいということか。

聞こえている筈なのに絶対に喋ろうとしない彼のジェスチャーが面白くて、あたしは横で二人のやり取りを凝視していた。

あたしの視線に気が付いたのか、突然、その彼がこちらをクルリと振り返った。

その顔を正面から見て、あたしも絶句する。

「ホンダ君・・・だよな？」

目の前に立っている作業着の男性もあたしを見て、目を大きく見開いた。

あたしの記憶に間違いがなければ、彼は本田準一。

中学生の時、あたしが初めて付き合った、初めての男の子だった。

出会い 1

彼・・・本田準一はあたしの初めての彼氏だった。

人生のどん底にいた中学時代に、あたし達は出会った。

中学3年生になった最初の日から、あたしの不幸は始まった。いや、再発したと言うべきか。

始業式でクラス替えの掲示板を見たあたしは青褪めた。

小学校の時、あたしを苛めていた女子集団が、あの頃とほぼ同じメンバーで同じクラスになってしまったからだ。

人並みよりはかわいいと言われる顔立ちで、運動もあまり得意でなかったあたしには、小学校から女子生徒の標的にされやすかった。あたしが男子生徒と話しをするだけで「男好き」と陰口を叩かれ、下校時には下駄箱から靴が消えていた。

今思えば、つまらない非モテ女どものやつかみだったんだけど、まだ今ほど度胸も座ってなかったあの頃のあたしにイジメは辛いものだった。

そして、小学校の時の苛めより、知恵もついてきた中学校になってからの方が、陰湿さは確実にグレードアップしていた。

今まで運良くクラスが離れていたのが、今年になって同窓会の如く小学校の苛めっ子集団が集まってしまったのだ。

当然のように、小学校の時の悪夢はまた繰り返された。

靴がなくなったり、机に落書きされるのはまだいい方だった。

体育の着替えに教室に戻った時、制服が無くなっていて、それが男子トイレの便器の中から発見された時、あたしは学校に行くのを辞めた。

それが6月だったのが、7月になり、夏休みも終わった時、あたしは登校するのを余儀なくされた。これ以上不登校が続いたらと心配する親から、煩くせつつかれ始めたからだ。

周りはすでに受験モードに入っている9月の初日にあたしは徐々に登校するハメになった。

一限は始業式、二限は夏休みの宿題の提出と今後の進路指導についての話で終わった。

三限は問題児のみ残されての担任との個人面談で、不登校で出席日数も足りないあたしは当然、メンバーに入っていた。

担任に呼ばれるまでの待機中、トイレに行った時に事件は起った。

用を済ませて個室のドアを開けると、待ち構えていた6人くらいの女子に取り囲まれた。

人が用を足している間中待つてたんだから、敵もいい根性している。呆然と立ち竦んだあたしに6人の手が絡みつき、あつという間に掃除道具が入っている個室に押し込められた。

この個室のドアだけは押さないと開かないのだ。

脱出しようとあたしは体当たりしたが、6人の力で塞がれているドアはビクともしない。

ドアの外からケタケタと笑う声が聞こえてくる。

その途端、ドアの上から水の入ったプラスチックのバケツが投下された。

水の中にはご丁寧に使用済みの雑巾が仕込まれていて、あたしは頭から汚水を浴びるハメになった。

どうしてこんな目に遭ってまで、学校に来る必要があるのか。

悔し涙で視界がボンヤリしてきたその矢先、ドアの外で大声が響いた。

「おい、そこにいるの誰だよ？」

まだ変声期前の、凜とした少年の声だ。

クラスに馴染んでないあたしには、初めて聞く声だった。

ドアの前を取り囲む女子達が気まずそうにブツブツ言うのが聞こえた。

「・・・ボンビー本田じゃん。あんたに関係ないし。どっか行つてよ！」

「あるよ。その中にいるの林だろ？先生に連れて来るように言われた。出せよ。」

「あんたに言われる筋合いはないって言ってるのよ、ボンビーマンのくせに！」

「うるせえな！俺が貧乏なのが、てめえに迷惑かけたか！？自分だつて扶養家族の分際で偉そうに言ってるじゃねえよ！」

ドアの外で『ボンビー本田』なる男子とあたしを閉じ込めている女子との間でバトルが始まった。

その男子に覚えは全くなかったが、話の流れから同じクラスの居残りグループらしいことは想像がついた。

その内、ドン！とドアに何かがぶつかる衝撃音が響いた。

主犯格の女子がヒイッと恐怖の悲鳴を上げたのがドア越しに伝わる。

「出せつつつてんだよ！マジで犯すぞ、この腐れブス集団が・・・」

やけにドスの効いた暴言が、ドアの向こうから響いてくる。

女子からの返事はなかった。

やがてバタバタと廊下を走って去っていく足音がドア越しに響いて、ボンビー本田が女子を撃退してくれたことが分かった。

「・・・大丈夫？」

外から開かれたドアの前にいたのは、あたしとさほど大きさの変わらない痩せた少年だった。

出会い 2

ドアの外から『ボンビー本田』少年は優しい笑みを見せた。その笑顔は女の子みたいで、この人がさっきのドスの効いた声の持ち主とは思えなかった。

中学三年の男子にしては線が細く、顔色も青白い。

黒い髪はボサボサで、散髪している気配は見られなかった。

優しそうな少し下がった目尻が子供っぽさを増長させている。

本来、真っ白い筈の開襟シャツは黄ばんであちこち擦り切れている。その半袖から伸びた細い腕は女の子みたいに青っちょろい。

・・・本当に貧乏なんだろうか・・・？

申し訳ないが、彼の第一印象は「栄養不良児」だった。

「・・・女子ってすげえ事するな。制服汚れてるけど、どうする？保健室行く？」

彼は汚水でズブ濡れのあたしを、頭からつま先まで見て呆れた声を出した。

彼にとつても、あたしの第一印象は「濡れ鼠」だっただろう。

個室のモップや箒に挟まれて泣きながら出てきたあたしに、彼は手を差し伸べた。

初めて優しくされて、あたしは更に泣いてしまう。

「・・・保健室行こうか？付き合っよ。」

結局、その日、あたしは個人面談をキャンセルして帰宅する事になった。

雑巾臭い濡れた制服と、久し振りの登校で起った事件のショックで面接どころではなくなつたからだ。

あたしの不登校の理由が明るみになって、保護者からクレームが来るのを恐れた担任は、今後は対策をするとしつこく言っていたが、もうどうでも良かった。

『ボンビー本田』少年は、家まで黙って付き添ってくれた。

さっきの罵声は無理して出したようで、元来、大人しくて無口な少年だった事はすぐに分かった。

「・・・あの、同じクラスですか？名前は？」

9月の日差しを避けようと公園の木陰を歩きながら、あたしは初めて彼に話しかけた。

まさか、恩人に対して「ボンビーさん」とは呼べないだろう。

でも、学校に行つてなかつたあたしは、彼の名前どころか存在すら知らなかつた。

「同じクラスらしいよ。俺も7月になって初めて登校したから、今日が初対面。本名は本田^{ほんだじゅんいち}準一。なんか、ボンビーで定着してるけどね・・・。」

クスクス笑いながら、本田君は言った。

笑うとこじやないだろうに。

「どうして学校に来てなかつたの？」

「ウチ、母子家庭で母親が別れた男からDV受けててさ。母親が逃

げてる間、しばらく児童保護施設に入れられてた。男もいなくなつたから戻ってきたんだけど、今、生活保護受けててマジ貧乏。」

全然笑えない事を本田君はサラリと言って退ける。

聞いたあたしのほうが、どこに突っ込んでいいのか分からない。ただ、彼があたしなんかよりずっと大人で強い人だって事だけ分かった。

「林さん、明日から学校来るよね？」

彼は無邪気な顔であたしに笑いかけた。

女の子みたいな優しい顔に、薄茶色の瞳が綺麗だ。あたしは急にドキドキして、頷いた。

「・・・本田君も行くよね？」

「母親がこのまま落ち着いてくれたらね。卒業まで一緒に行こう？」

その後、家に着くまでの20分程、あたし達は手を繋いで歩いた。骨ばった冷たい手は力強くて、あたしは引つ張ってくれる優しい本田君が好きになった。

とても自然の事のように、あたし達はその日から付き合い出した。

中学3年生だったあたし達が付き合うと言っても、一緒に登下校したり、放課後、図書館で受験勉強したりするくらいだった。

本田君に反撃された上、先生にも内申点を盾に釘を刺されたイジメっ子集団は、パツタリあたしを弄るのを止めた。

時期的にも受験勉強モードになっていて、皆、イジメをやるほど余裕がなくなっていたのも大きな理由だ。

やっとあたしに穏やかな学生ライフが戻ってきた。

イジメっ子ばかりでなく、あたしも当然、受験戦争に巻き込まれていった。

あたしの頭では大学進学が目的の普通科進学校に行くのは到底無理で、最初から合格圏内の商業高校を受験するつもりだった。

学校に来てなかった割には意外にも頭が良かった本田君は、普通科に進学希望を出していた。

「・・・学校離れちゃうね。」

「大丈夫。美由紀の事、ずっと好きだから。」

今思えば恥ずかしい台詞を、15歳の本田君は真剣に言ってくれた。その言葉を15歳のあたしがどこまで本気で捉えていたのか分からない。

彼はあたしよりずっと大人で将来の事まで考えていたのに、あたしときたら彼氏ができて浮ついてるだけの、ただのバカ女だった。

彼との別れは唐突にやってきた。

冬休みが終わってから、彼が学校に来ることはなかったからだ。

彼の母親を追っていたDV男が戻ってきて復縁を迫ったが拒否され、仕返しに彼に暴行を加えたのだ。

1週間、監禁されたまま暴行を加えられた彼は瀕死の状態で見えられ、そのまま母親と一緒に県外の施設に保護されたらしい。

もちろん、その行方は誰にも明かされなかった。

暴行した男も逃走したまま、逮捕されずに終わった。

あたしがそれを知ったのは、彼が住んでいた市営団地に住んでいる子が噂しているのを偶然聞いたからだ。

あくまでそれは噂で、正しい情報はどこにもなかった。

中学生だったあたしには、彼を探すとか犯人を捕まえるとか、大それた事はとてもできなくて、突然いなくなった初めての彼氏を想って泣くしかなかった。

やがて卒業し、高校生活が始まったあたしは少しずつ彼の事を忘れていったのだ。

トラウマ 1

マクドナルドのカウンターの前でまさかの再会を果たしたあたし達は、お互い呆然と見つめあったまま固まっていた。

あたしの頭に中学時代の思い出が走馬灯のように駆け巡る。

すっかり忘れていたクセに、彼の顔を見た途端、公園で隠れてこっそりしたキスのことまで思い出すんだから人間って都合良くできるもんだ。

固まっているあたし達に、さっきの高校生バイトの女の子が言い難そうに声を掛ける。

「あの〜、フィレオフィッシュセットとテリヤキバーガーセット、店内でお召し上がりできてますけど？」

その声にあたし達は同時に我に返って、慌ててお互いのトレイを掴む。

すっかり成長してあたしを見下ろしている彼に、あたしはドギマギしながら小さな声を掛けた。

「・・・あの、良かったら一緒に食べない？」

その言葉に、彼は無言のまま嬉しそうにニッコリ笑った。

トレイを持って、あたし達は二階に上がった。

夜の9時を回った駅前のマクドナルドは、さすがに人が少なかった。

あたし達は人目につかないような奥まった窓際の二人用の席に向かった。

成長した彼は確かに長身で大柄なんだけど、相変わらずの痩せ型でロック歌手みたいな体型だ。

今だに「栄養不良児」なんだろうかと、ふと心配になる。

彼は黙ったまま、テーブルを挟んだあたしの正面に座った。

少し恥ずかしげなその笑顔は、確かにあの頃と変わらない『ボンビ一本田』だった。

あまりに突然の再会に、あたしは何から聞いて話していいのか分からず、取り合えずポテトを摘んで口に啜える。

「・・・久し振りだね。今までどこにいたの？」

おずおずと問いかけたあたしに、本田君は何か言いかけて口を半分開けたが、すぐに唇を噛み締めた。

作業着の胸ポケットからボールペンを取り出し、トレイに乗っていた広告の裏にサラサラ何か書き始める。

『大阪 このまちに戻ってからは2年 みゆきは元気だった？あえてうれしい』

書いたものを見せられて、あたしは思わず眉間に皺を寄せる。

「ねえ、何で喋らないの？聞こえてるんでしょ？これってかなり面倒くさいんだけど？」

少しぶっきらぼうに言ったあたしに、彼はひどく悲しそうな顔をした。

その顔は女の子みただった中学時代の面影が残ってて、優しそう

な目尻が下がったところなんかあの頃のままだ。
あたしが彼の顔を観察している間、彼は広告の裏に新たなるメッセージを書き始めた。

『オレはしゃべれない 声がでない 筆談でいい?』

それを見て、あたしは怪訝な顔をして彼の顔を改めて見つめる。

「何で声が出ないの? 中学校の時は普通に喋ってたじゃん? 喉の手術でもしたの?」

困った様に、彼は俯いてボールペンをクルクル回した。

これをすると言わんと浪人すると言わんとジंकスがあるペン回しが彼は昔から得意で、いつも無意識にやっていたのを思い出す。

ここにいる男性は確かに本田君に間違いはない。

頭を掻きながら、彼は再びボールペンで書き殴る。

『義父にころされかけてから声がでなくなった』

「はあっ!?! 殺されかけた?」

あたしは思わず、声を上げた。

照れてる場合じゃないだろうに、彼は恥ずかしそうに首を竦める。

「あの時……いなくなっってからDV男に暴行されたってのは、本当だったの?」

黙って頷く彼。

あたしは驚愕の表情をしたまま硬直していた。

具体的に何をされたかは聞けないけど、声を失うほどの恐ろしい事

が起つたことは間違いない。

「……その後、どうしたの？」

『ケガがなあるまで半年くらい入院 それから母親と大阪にいった
一年おくれてむこうで4年夜間高校行って 2年前一人でかえつ
てきた』

器用にペンを回しながら、彼はサラサラと書き殴っていく。
同じ年の彼の壮絶人生に、あたしは呆気に取られて文字を見つめて
いた。

『みゆきは今なにしてる？OL？』

そう書いた紙を見せると、本田君はあたしの着ていた事務職の制服
を指差した。
なるほど。

仕事帰りでそのままの格好だったから、これを見ればOLだと分か
るだろう。

「当たたり。小さい会社で5年も給料計算やってる。もう辞めたい
よ。つままないし給料少ないしさ。早く結婚したいくらい。」

思わず出たあたしの本音を聞いて彼は苦笑する。

そしてまた、サラサラと紙に台詞を書き綴っていく。

『彼氏いないの？』

「……言うと思った。結婚するようなのは相手いませんよ。こんな
つままない女、どうせ誰も相手にしてくれないって。」

嘘をついたつもりはなかった。

今夜、逢うことになっていたあの妻子持ちのイケメンは彼氏としてカウントしたくなかった。

彼にとつたら、あたしなんて所詮セフレだ。

そういう体だけの付き合いをしているあたしを本田君は軽蔑するに違いない。

あたしは優しくて正義感の強かった本田君に、今の汚れた自分を知られたくなかった。

何にも知らなかったあの頃のままのあたしを思い出して欲しかったのだ。

あたしの思惑も知らずに、無邪気な本田君は優しく笑って、またペンを走らせる。

『よかった オレ まだみゆきのこと好きだよ』

・・・相変らずの直球。

言われたこつちが赤面してしまう。

あたしはもう、そんな事を言って貰えるような女の子じゃないのに。告白は嬉しかったけど、申し訳なかった。

携帯の出会い系サイトで見つけた金払いのいい男とばかり遊んでるって言ったら、前言撤回するに違いない。

真っ直ぐに見つめる彼の視線を逃れるように、あたしはハンバーガーにかぶり付いた。

トラウマ 2

マクドナルドの二階の窓から見える駅前の夜景は、風俗店のネオンだけが派手に光り輝いていてチープな事この上ない。

あたし達はそのシケた夜景を眺めながら、お互い無言でハンバーガーを食べ続けた。

彼が喋らないのは仕方がないとして、日頃お喋りなあたしが無言でいられるのは自分でも驚きだった。

思えば彼と付き合ったのはたった4ヶ月だ。

その4ヶ月の間、あたし達は一緒にいてもお互い黙っていることが多かった。

あの頃、その沈黙が寧ろ心地良かった。

サイトで知り合った男性を前にすると、あたしは素の状態よりテンションが上がって喋り続けてしまう。

それは相手を喜ばそうと無意識にやっているあたしのパフォーマンスの一つだった。

喋っていないと飽きられる。

つまらない女だってバレてしまう。

そんな脅迫観念から、あたしのテンションは常に高かった。

だから一緒にいるだけで落ち着くなんて関係は今までになかったのだ。

今、目の前で黙ってハンバーガーを食べている本田君にパフォーマンスは無用だつて分かっている。

中学時代のあたしを知ってる彼に見せかけのハイテンションは通用しないし、そんな事をしなくても彼はあたしを見てくれる。

そんな安心感をあの頃と変わらない彼の笑顔に感じていた。

10時の閉店を知らせに高校生バイトが二階に上がって来た時、あたし達は紙屑ばかりになったトレイをダストボックスに持っていきながら店を出た。

外に出た途端、真冬のような冷たい風が肌に刺さって、あたしは思わず身を竦める。

隣接する店舗のシャッターの前に黒いスクーターが留めてあるのを彼は黙って指差した。

「何？あれ本田君のスクーター？」

質問してやると、彼は自分を指差し頷いた。

キーを作業着のポケットから出すとそれをあたしに見せて、バイバイと言うように手を横に振った。

「えっ！何？もう帰るってこと！？久し振りに会ったのに！？」

さつき、あたしの事まだ好きだって言っただけだからなのに。

ご飯食べたらいバイって、中学生じゃないんだから。

あたしは驚きを通り越して、半ば憤慨して抗議した。

「何で？連絡先も聞いてくれないの？もう会うつもり無いです？」

このままバイバイでもう会えなくてもいいってことなの？」

矢継ぎ早に詰問するあたしを見下ろして、彼は困った顔で唇を噛む。口を開いて何かを話そうとはするのだが、出るのは溜息のような息の音だけだった。

本当に声が出ないのを見ただけで分かった。

でも、それとこれとは話が違う。

「あたしと会えて嬉しかったんでしょ？ だったらもつと一緒にいてよ。まだあたし話してないこと一杯あるんだから。今からどっか他の店行ってもいいし、今日がダメなら他の日に会うとか・・・てか、携帯くらい教えてよ。とにかくこれでバイバイなんて認めないから！」

あたしは鼻息荒く言い切った。

これは嘘偽りない言葉だった。

あたしはまだまだ彼と別れたくなかったし、このまま二度と会えなくなるのは絶対に嫌だった。

彼は目だけ上を向いて少し考えてから、さっきのボールペンを胸ポケットから出して自分の掌に何かを書きつける。

困ったような少し照れたような顔で、彼は手をあたしに向ける。

『ウチくる？』

開いて見せた掌の言葉に、あたしはやつと納得してコクンと頷いた。

パーキングから車を出して、あたしは前を走る本田君のスクーターの後をついて走った。

「ウチ」と言ったが、誰とどこに住んでいるか何も聞かないまま、あたしは彼の後を追っかけている。

喋れない事がこんなに不自由だとは思わなかった。

波乱万丈な彼の身の上を逐一紙に書いていたら、明日になっても終わらないだろう。

そのまま出版したら印税が入るか。

この街に戻って2年って言った。
どうしてすぐにあたしに会いに来てくれなかったんだろう。
2年間、どんな生活をしてたんだろう。

前を走る彼の背中を眺めながら、あたしはアクセルを踏み続けた。

駅前の繁華街を抜けると静かな住宅街が広がっている。

田舎の駅前が栄えているのは半径1km以内だけだ。

真っ暗になった住宅街の細い道路をスクーターは縫っていく。

やがて、彼のスクーターは2階建ての小さな白いマンションの前で
停まった。

入居者募集の立て看板に書いてある不動産会社の名前を見て、ここ
が敷金礼金0のマンスリーマンションだと分かった。

僅かばかりのスペースの自転車置き場にスクーターを突っ込むと、
本田君はあたしの車に向かって駆け寄ってきた。

窓から車を指差し、その後マンションの裏手を指差す。

裏側には歩道を挟んで川があるらしく、ガードレールの前には違法
駐車車がズラリと並んでいるのが見えた。

そこに停めると言うことか。

案外、ジエスチャードで何とか通じるもんだ。

あたしは妙なところで感心しながら車を移動させた。

彼の部屋は201号室。

つまり角部屋だ。

薄暗い電灯がついたコンクリートの廊下をあたしは本田君の後につ
いて歩いた。

彼は作業着のズボンのポケットからチェーンでベルトに繋がってい
るキーケースを引っ張り出した。

慣れた手つきで鍵を開けると、ドアを開いて、後ろにくっ付いていたあたしに手招きする。

「あ、お邪魔します。」

恐縮しながら、あたしはドアを支えている彼の前を通って中に入った。

トラウマ 3

玄関入ると右手に小さなキッチン、反対側がユニットバス。中は6畳くらいの一部屋だけで、シングルベッドがその半分を占拠している。

カーテンのかかった開き戸の向こうは小さなベランダで、そこからマンションの裏を流れる川が見えた。

ハンガーにかかった作業着が2枚くらいとTシャツがカーテンレールに引っ掛かっている。

殺風景な男の子の部屋という印象だった。

フローリングの床に座り込むのも変な感じだったので、あたしはベツドの縁に少しだけお尻を乗せて座った。

彼は黙ったまま、キッチンに立ってお湯を沸かしている。

お茶でも出してくれるんだろう。

ヤカンを見つめる彼の横顔を眺めながら、あたしは自分がやっと若い男の子の部屋に押しかけてしまった事に気が付いた。

・・・ふしだらな女の子だと思っただけかな。

まさか平成のこの時代にそんな固いコト言う人はいないだろう。

あたし達、8年ぶりだと言っても知らない間柄じゃないんだから。

そりゃ、キスマでだったけどさ。

気が付かない内にブツブツと独り言を言ってたあたしの前に、突然ヌツとコーヒーカップが差し出された。

顔を上げると至近距離に本田君の顔がある。

「うっわあー！」

びつくりしたあたしはベッドに仰け反りながら後ずさった。
声を出さずに笑顔を作りながら、彼はあたしの隣に座ってもう一度
カップを差し出す。
インスタントの粉にクリープが入っているコーヒーだって、あたし
にもすぐ分かった。
まるで学生の一人暮らしだ。

「ありがとお……。」

彼からカップを受け取って口にするると濃厚な甘さが広がった。
冬並みの冷気で冷えた体に熱いインスタントコーヒーは五臓六腑に
染み渡った。

肩が触れ合いそうなくらい隣に座ってる本田君を感じて、あたしの
胸は勝手にドキドキし始める。

8年ぶりに会ったばかりなのに。
何期待してんだ、あたし！

カップに口を付けながら、あたしは上目でこっそり本田君の横顔を
観察した。

中学校の時はまだ女の子みたいだった綺麗な顔が、シャープなライ
ンを残したまま男らしくなっている。

端正な横顔だけど、相変らずの青白い顔色に黒い髪がかかっている
のが病的な印象だ。

この部屋で一人で住んでいるんだろうか。
ご飯はちゃんと食べてるのかな。

「……本田君、ここで一人暮らし？何の仕事してるの？」

あたしの問いかけに、彼は口を開いてから、思い出したように照れ笑いを見せた。

自分でも時々、声が出ないことを忘れているみたいだ。

ジェスチャーで返事をするにはハードルが高い質問だった。

玄関のドアの郵便受けから出張エステやらエロビデオ配達やらのチラシを引っ張り出して来て、その裏面に返事を書き始める。

『一人暮らし　ここは派遣会社の寮　自動車部品工場の請負　期間工だよ』

「ちやんとご飯食べてるの？自炊してるの？」

『しない　弁当ばっか』

「ダメじゃん。だからそんなに細いんだよ。」

『これは生まれつき　オレは太らない』

彼はペンをクルクル回しながら、可笑しそうに笑った。

尤も、それは顔の表情だけで、笑い声は出てこなかった。

その代わりに喉の奥から吐息のような呼吸が聞こえた。

「・・・ねえ、もう声出ないの？一生治らないの？」

声のない彼の笑顔を見ているのが辛くて、あたしは思わずその質問をした。

彼は少し目を伏せて考えた後、再びペンを走らせる。

『わからない　心因性のモノだから　首しめられてころされかけたのがトラウマになってる　時々息ができなくなる』

それを聞いて、あたしは背筋が寒くなった。

そして、あの時の噂を思い出す。

一週間、DV男の暴行され続けた15歳の本田君は声を失うほどの恐怖と苦痛を味わったに違いない。誰にも助けてもらえなくて、きつと絶望で声が枯れるまで泣き叫び続けたんだろう。

彼の書いた後のチラシがどんどん増えてベッドに散らばっていく。あたしはそつと彼に体を寄せた。

二人の肩が触れ合ったけど、彼は動かなかった。

どうやら嫌がっていない事を確認してから、あたしはその端正な顔を両手で包み込む。

目を伏せたまま本田君は抵抗もせず、されるがままになっていた。

あたしは顔を近づけて、唇にそつとキスをした。

乾いた彼の唇は冷たくて固くて、そして、あたしを受け入れようとはしなかった。

「・・・どうして？嫌だった？あたしの事、軽蔑した？」

マネキンに口付けたみたいが無意味なキスにあたしは悲しくなった。

彼は申し訳なさそうに、首を横に振る。

そして、再びペンを手に取って、メモを書き始めた。

『オレできないんだ 期待にそえなくてごめん』

目の前に差し出されたメモを見て、あたしは愕然とした。

依存 1

彼はペンを回しながら、申し訳なさそうな顔で頂垂れた。

『期待に沿えない』という真意をはかりかねて、あたしは彼に詰め寄る。

「・・・それ、どういう意味？できないって、それもトラウマ？それとも、あたしとはソノ気にならないって事？」

『いいたくない とにかくできない ごめん』

再び広告にペンを走らせると、彼は悪霊退散のお札の如く、あたしに突きつけた。

・・・って、あたしは悪魔か！？

ム力ついたあたしは彼の手から広告を奪い取って、目の前でビリビリと破り捨てる。

「失礼ね！別にあたしだって、今更本田君と何かしようって思ってるわけじゃないんだから！もういい！帰る！」

勢い良くあたしはベッドから立ち上がった。

彼も慌てて立ち上がって、クルリと玄関に向かって背を向けたあたしの背中に追いつがる。

あたしの手がドアの取っ手に触れた時、彼の長い両腕があたしを背中から抱き止めた。

あたしの背中に、ピッタリくっ付いた彼の胸の温かさが伝わってくる。

抱き締める両腕に力を込めながら、彼はあたしの耳元に吐息のように囁いた。

「ゴ・・・メン・・・」

声にならない彼の息は、確かにそう言った。

頑張つて声を出そうとしてくれてるんだ。

彼の思いは痛いほど伝わってくる。

なのに、あたしは素直じゃなかった。

結果的にあたしからの誘いを断わられた形になった事に、プライドを傷付けられたからだ。

「・・・帰るよ。あたし達、会わなきゃ良かったね。」

その言葉に、彼の手からスッと力が抜けた。

首に巻きついていているその両腕を、あたしはそつと外す。

チラリと目だけ動かして後ろを見ると、悲しそうな顔で彼は腕を下ろしていくところだった。

腕が完全にダラリと降ろされた時、あたしはドアを開けて、木枯らしが吹き荒れる外気の中に飛び出した。

翌日。

聞き慣れた携帯の着信音であたしは目を覚ました。

ピンクの遮光カーテンの隙間から差し込む明るい日差しが、ちょうど、あたしの目の上に直撃している。

本田君のアパートから飛び出してから、結局、あたしは自宅に戻ってきて自分のベッドで不貞寝してしまったんだ。

昨日の出来事が少しづつ、頭の中で再形成されていく。

その間も携帯の着信音は鳴りっ放しで、目を閉じたまま、あたしの手は無意識に携帯を探してベッドの中を這い回った。

やがて枕の後ろに放置されていたストラップが手に触れ、あたしはそれを手繰り寄せて着信ボタンを押した。

「もしもし？ミユちゃん？俺。昨日はごめん。まさか、突然、戻ってくるとは思わなかったから。」

あー・・・聞き覚えのあるこの声・・・。

誰だったっけ？

昨日までメチャクチャ好きだった声の持ち主は本田君との一件によつて、あたしの脳裏からキレイサツパリ削除されていた。

「・・・ノブリン？どーしたの？朝早いじゃん？」

「もう遅っせーよ。今11時だぞ？昨日はお前こそ他の男と遊んでたんじゃないのか？」

携帯の向こうから、朝型人間ノブリンの甲高い笑い声が聞こえた。

ノブリンというのは、会う筈だった妻子持ちの三十路のイケメンの事だ。

本名が河合信彦だから「ノブリン」

今となってはどーでもいいけど。

「・・・ノブリンにカンケーないし。約束すっぱかしといて、今更、何か用？」

「嫁が子供連れてまた実家に帰ったんだ。今度こそしばらく帰って来ないから、今から来いよ。」

「・・・めんどくさ・・・。いいよ、もう。気が乗らないもん。」

「怒るなよ。埋め合わせするからさ。いつもの場所で待ってる。車で向かえに行くよ。」

「・・・ご飯はイタリアンがいい・・・。」

「じゃ一時間後、いつもの場所で。いい？」

こうなると、もう抗えない。

あたしは観念して彼の誘いに乗る事にした。

彼が言ういつもの場所というのは、あたしの自宅から徒歩15分程にある小さな公園の駐車場の事だ。

妻子持ちのノブリンのマンションの近くであたしを車に乗せる訳にはいかなかったし、自宅前まで迎えに来て貰うこともできなかった。でも、いつもそこで待ち合やす事にしていた。

夜になると全く人気がない公園の駐車場なら、車内で済ます事もできる。

何かにつけて便利な場所だった。

昨日は化粧さえ落とさずに寝入ってしまったので、あたしはノロノロとベッドから這い出してシャワーを浴びた。

そして彼好みの服をチョイスする。

この寒いのに肩が出た黒のシャツとショートパンツ。

ロングブーツに足を捻じ込み、レザーのショート丈のジャケットを羽織る。

お化粧はバシバシの付け睫毛でアイラインを強調。

濡れたような唇にする為、ベタベタのグロスを塗りたくる。

ノブリン好みのバカ女の完成だ。

あたしは玄関の鏡で全身チェックしてから家を出た。

『オレはできない 期待に沿えない いいたくない とにかくできない』

公園に続く歩道を歩きながら、あたしは昨日の彼が書いたメッセージを頭の中でパズルみたいに組み立てていた。

あたしが嫌なんじゃなくて、もしかしたら本当に精神的な問題の為にできないって意味だったんだろうか。

だとしたら、あんな風に飛び出してきたのは申し訳なかったと思う。でも、その結果、もう会う事がなくなれば、それはやっぱり良い事になるだろう。

彼がセックス恐怖症だとしたら、あたしはセックス依存症だからだ。相反し過ぎて、あたし達が付き合うのはもう無理だ。

付き合ってたあの頃は、まだ二人とも健全な中学生だった。

自分達が将来こんな大人になるなんて想像もしなかったのに・・・どこであたし達は迷子になっちゃったんだろう。

あたしは一人で自嘲しながら、彼の待つ公園に向かって足を速めた。

依存 2

葉っぱが落ちた銀杏の並木を通り抜けると小さな駐車場がある。

10台分しかないこの駐車場に、公園で遊ぶことが目的で停まっている車は少ない。

その中に黒のVOXYが既に到着しているのを発見して、あたしはノロノロと近寄った。

あたしの姿に気が付いたのか、運転席のドアが開いて、中から男性が出てきた。

ノブリンだ。

整った顔というより、優しそうな甘いマスク。

二重の大きな目は少し下がっていて、笑うとちょっと目尻に皺が寄る。

若い頃はジャニ系だったと豪語するだけの事はあると思う。

中肉中背で、昨日の本田君よりは少し小さいくらいだ。

でも、それが他人に威圧感を与える事なく、親しみやすい雰囲気を作っている。

彼が有能な営業マンである所以だろう。

黙ってても人が寄って来る華のある人種だ。

車の前で悪びれなくあたしに手を振るノブリンを見て、溜息が出た。

あたしは彼が好きだ。

でも、あたしの愛情の対象が彼でなくてもいい事には気が付いていた。

そりゃ、彼が今から妻子を捨ててあたしと一緒にになりたいって言うてくれるなら、否応なく乗るだろう。

でも、それは有り得ないし、あたしも罪のない子供を犠牲にしてまで彼との愛を貫くとか、そういう覚悟を持っている訳ではなかった。

つまり、あたしが彼に求めているものは、ひとときの刺激と生き甲斐だ。

変化のない日常から解放される金曜の夜のひととき。

本能のまま動物みたいに喘いで、醜態の限りをお互いに見せ合うひととき。

その時だけは将来の不安も、月曜の仕事も、退屈な日常も全て忘れられる。

あたしが自分が生きてる事を実感できるのはセックスしている最中だけだった。

その相手が今はノブリンなんだけど、別に彼に固執している訳じゃない。

新しい相手との初めての時が、一番ドキドキして盛り上げられる。

携帯で見つけた相手とはリピートしない主義だったあたしが、ノブリンとはダラダラ続いているのは、彼が金払いが良くてイケてたのと、セックスの相性が良かったからだ。

言い方は悪いけど、あたしは金曜の夜に抱き合える相手がいれば誰でもいい。

もちろん、ノブリンである必要もない。

それでも彼が突然いなくなるのは、あたしにとって恐怖だった。

目的も夢もない日常に取り残されて、明日から何を楽しみに生きていいか分からなくなる。

彼とのセックスがなくなってしまうたら、あたしの唯一生きてる時間がなくなってしまう。

分かっても止める事はできない。

これを依存症って言うんだろう。
日常を忘れる為、先の事を考えないようにする為、あたしはセック
スに溺れていく。

あたしは彼に近づくと、爪先立ちで彼の頬に軽いキスをした。
軽いマリン系のコロンの香りがフワリと鼻を掠める。
営業マンらしい厭味のないセンスも、あたしは気に入っていた。
彼はあたしを抱き締めながら、耳元で早口で囁いた。

「昨日はすっぱかして悪かった。マジで突然だったんだ。赤ちゃん
がまだ小さいから3ヶ月は実家にいるって言ってたのにさ。ウチに
帰ったらいるんだからビックリしたよ。今日は埋め合わせするから
な？」

「もー、あたしの事なんかすっかり忘れてたんだね。ノブリンの愛
の大きさがよつく分かりました。」

あたしだってノブリンの事なんかサツパリ忘れてたのは棚に上げて、
怒ったフリしてツンを顎を上げる。

彼好みのおバカ女のパフォーマンス。

バカバカしいけど、一応、お約束通りにやってやらなければ。

離れない程度に男を繋ぎ止める術を、あたしは経験から既に習得し
ていた。

「怒った顔もかわいいよ、ミュちゃん。ところで腹減ってない？イ
タリアンが良ければ、俺のお勧めレストランがあるんだけど？」

「・・・どう？」

「とあるホテルのランチバイキング。今、イタリアンフェアやっているんだって会社の女の子が言った。本物のイタリア人シェフがいるとかいないとか。バイキングだけど本格派だって。」

「ふーん。いいじゃん。で、その後は？」

彼はあたしの長い髪を掻き上げ、首筋に唇を這わせた。舌の生暖かい感触に、あたしはゾクッと肌が粟立つ。

「そこで一部屋取ってある。今夜は帰れないよ。」

彼の高めの甘い声が、あたしの体に巻きついてくる。期待で早くも熱くなってくる体を、あたしは彼に預けてキスをした。

依存 3

一時間後、あたし達は彼の車で海に見えるリゾートホテルに到着した。

ホテルの中のレストランで評判のイタリアンバイキングを堪能した後、あたし達は彼が取っておいた一室に直行した。

部屋に入ってドアが閉まると同時に、ノブリンはあたしを捕まえて荒々しく口付ける。

もどかしそうにあたしのジャケットを剥ぎ取り、シャツを首まで捲り上げ、ブラをずらして胸に口付けた。

そのまま抱き抱えるようにあたしをベッドまで誘導してから、乱暴に押し倒す。

さっきまでの優男とは打って変わった豹変振りだ。

早速、獣と化したノブリンを、あたしは満足して眺めた。

彼の為に半分だけ脱がされた上半身は、敢えてそのままにして置く。「半分脱がされた強姦されたっぽい服装」が彼の好みだつて事を知っているからだ。

そして、あたしもそのシチュエーションは嫌いではなかった。

「や・・・やだ・・・ちよつと、待つて・・・」

ベッドの上で悩ましげな声でそう言いながら、あたしは胸を隠して彼から逃れようと体を屈める。

もちろん、そのつもりで来てるので抵抗する理由は全くないのだけど、少し嫌がる事で彼がより早く着火するのを知っているから、一応やっておく。

計算通り、あたしの逃げの仕草に興奮したノブリンは更に欲情した。

強引にあたしの両腕を掴むと左右に大きく広げた。仰向けでベッドに磔にされたあたしのブラから胸がはみ出して顕わになる。

それを獣のような目でノブリンは見つめてニヤリと笑ってから、ゆっくり口に含んだ。

日ごろは優秀な営業マン。

お金も持ってて、妻子を養い、社会的地位もある男性。こんな人でも、セックスの時はただのオスだ。

高卒で手取り月収13万のOLのあたしと対等な関係。それがあたしには快感で、心地いい。

人間はいつから動物でなくなっちゃったんだろうと、あたしは時々考える。

社会というルールの中では、同じ人間なのに、あたし達には敷居があり上下関係がある。

普段のあたしに、ノブリンが対等に接してくれる事はない。

彼にとってあたしは、お金目当てのバカ女だ。

でも、セックスの時だけは違う。

どんな人でも一匹の動物に戻って、快楽に喘ぎ、鳴き叫ぶことができる。

ノブリンだって、仕事の事、妻子の事や色々なストレスを抱えてる。その彼が全てを忘れ、一匹の獣になってあたしに襲い掛かり、欲情して、腰を振る。

あたしは彼が野生に還るこの瞬間が好きだった。

いつまでも、この快楽に溺れていたたい。

明日なんて来なくてもいい。

今だけでいいから、メチャクチャに壊れたい。

激しくなった律動に、あたしは泣きながら嬌声を上げ続けた。

激しい行為の後のタバコは最高だ。

重い体に心地よい気だるさを感じながら、自堕落な一服を楽しむ。ノブリンは、「オヤジくせえ」って笑うけど、あたしは彼の腕枕で寛ぎながらのこの一服が止められなかった。

あたしが啜っていた一本をノブリンは自然な仕草で奪い取り、自分の口を持っていく。

彼が吐き出す緩やかな煙を、あたしはまったりと眺めた。

35歳のノブリンのお腹は、接待で飲んだアルコールでぶよぶよしている。

運動らしい事もせず、飲み会に明け暮れていては無理もない。

彼がメタボと呼ばれるようになるには、そう時間は掛からないように思えた。

あたしは彼のお腹に手を這わせて、その手触りを楽しんだ。

「・・・なんだよ。くすぐりたいじゃん。」

「ノブリン、またお腹出てきたね。もう中年だし、しょうがないけどさ。」

あたしの言葉に彼は、ギョっとした顔でお腹を隠す。

もう、見ちゃったって。

あたしは笑って、お腹の肉を摘んでやった。

「大きなお世話だ。これは接待太り。優秀な営業マンに与えられる

荣誉の印だ。」

「その事を、世の中じゃ「ビール腹」と呼ぶのよ。あーあ。ノブリンもオジサンなんだよね。」

「オジサン言うな。大人の男と呼べよ。」

「やだ、バツカみたい。」

行為の後の他愛もない会話。

くだらない話をして、お互いの肌の温もりを感じながら眠りにつく。これもセックスの醍醐味だと、あたしは思う。

ここまでは、恒例の儀式だった。

でも、今日は違っていたのだ。

ピピピ・・・ピピピ・・・ピピピ・・・

アラームみたいな携帯の着信音が、突如として静かな部屋に響き渡った。

ノブリンの携帯だ。

彼はその音にびっくりして飛び起きると、慌ててベッドを降りて床に転がっていた携帯を掴んだ。

液晶画面の着信番号を見て、頭をガリガリ搔く。困った時の彼のクセだ。

「・・・出れば？誰から？」

気を利かせたあたしの言葉に、彼は弱気な笑みを見せた。

「・・・俺の奥さん。悪いな。ちょっと黙ってるよ。」

ああ、そーなんだ・・・。

彼が言いたい事は分かったので、あたしは不貞腐れて羽根布団を頭から被った。

薄い布団越しに、奥さんと話す彼の声が聞こえてくる。あたしは思わず耳をそばだてた。

「……今？だから、会社にいるって言ってるだろ？信じないのか？……だから、そんなのいないって……分かった。すぐ帰るから。……ああ……まず話を……ああ。」

聞いている内に、あたしの体は恐怖で硬直してきた。間違いない。

奥さんに、あたしとの事がバレてる。

だとしたら、彼とはもう会えなくなるかもしれない。

そう思っている間に、被っていた羽根布団が捲り上げられた。

目の前に、苦虫を潰したような顔のノブリンが座っている。

「ごめん、ミユちゃん。今から帰らなくちゃ。実家に帰った筈の嫁がマンションにいるみたいなんだ。どうやら、バレてるらしい……。取り合えず支度して。送るよ。」

目の前が真っ暗になるのを感じて、あたしはベッドのシーツを握り締めた。

期待 1

夕方6時の海岸線は、街灯もなくて、既に夜の闇に包まれている。もと来た道を走っていくVOXYの助手席で、あたしは不貞腐れて黙っていた。

携帯を切った後、彼はベッドにあたしを残したまま、さつさとバスルームに入ってしまった。

放置されて呆然とするあたしの耳にシャワーの音が聞こえてくる。僅か5分後、彼は体を拭きながら出てきた。

まだ湯気が立ち上る体に、床に脱ぎ捨ててあったシャツを纏い、パントスを履く。

「ミユちゃんも、早くシャワー浴びて。10分後にここ出るよ。嫁が会社に確かめに行くって言ってるんだ。先回りして会社にいないと、嘘言ったのがバレちまう。」

事務的にノブリンはあたしに通達した。

幻滅しまくったあたしは、思わず、彼にクッションを投げつける。

さっきまでのまったりした雰囲気が一気に消滅すると、目の前のこの男はタダのビール腹のオジサンだ。

「何よ、臆病者！その変わりっぷりは酷過ぎるんじゃない？」

意外に反射神経のいいノブリンは、飛んできたクッションを顔の前で難なくキャッチする。

「だから謝っただろ？頼むから早くしてくれよ。そもそもお前だつて俺が結婚してるの承知で付き合ってたんだから、そこは協力すべきたろ？」

「変わり身が早過ぎだつて言っただけ。それじゃ、何？あたしが体だけの女みたいじゃない。」

ノブリンはウンザリした顔で宙を仰ぐと、クッションをあたしに投げ返してきた。

若くても運動神経のないあたしの顔に、クッションは直撃した。

「ミユちゃん、俺はこんな事で家庭を壊したくないし、今の仕事も失いたくない。協力してくれないなら、君をここに置いていく。支払いは済ませておくから、明日チエックアウトして自力で帰ってくれ。」

「車もないのに、こんなトコからどうやって一人で帰れって言うのよ？」

「それが嫌なら、今から10分で用意して。でなければ置いてく。」

揺ぎ無い彼の言葉に、あたしはショックを隠し切れず、溢れてきた涙をクッションで拭った。

この人とはもうダメだ。

あたしの金曜の夜が無くなってしまふ事を確信した。

ノロノロとベッドから這い出ると、スラックスに足を通しているノブリンの横を通って、あたしはバスルームに向かった。

「ミユちゃん、連絡は後日するよ。今日は嫁に詫び入れる羽目になるかもしれないから。このまま会社に直行したいから、駅前で降りてもらっていいかな？そこからだったらバスで帰れるだろ？」

ぶーたれてるあたしの御機嫌を取るかのように、ノブリンは営業用の優しい声で問い掛けてくれる。

彼が何を言っても、もう無駄なのに。

奥さんの出方次第で、あたし達は永久に会えなくなるのは分かっていた。

「・・・いいよ。バスが通つてるところでテキトーに降ろして。あたし達、もう終わりでしょ？」

彼は言い難そうに、また頭を掻く。

「結果的にそうなる可能性は高いな。誤魔化し通せる相手ならいいけど、生憎、そういう女じゃないんだ、嫁は。悪いけどバレてたとしたら、もう会えないよ。」

あたしの最大の恐怖が、彼の口からはつきり言い渡された。

彼はもう会えなくても、さほど困らないから、こんなに簡単に言い切れるんだろう。

捨て台詞の代わりに、あたしは意地悪な質問をした。

「ね、あたしと奥さん、どっちが好き？」

彼は返事もせず、無言で運転を続ける。

やがて、前を向いたまま、彼は言った。

「奥さん。今までもこれからも、ね。・・・ミユちゃんには悪いけど。でも、君もそうだろう？」

「何が？」

「俺じゃなくても良かったんでしょ？ 退屈しのぎになれば。」

あたしは黙ったまま、窓の外の真っ黒な海を見つめた。

・・・案外バカじゃなかったんだな、ノブリンは。

思ったより賢いこの男には、あたしのイタイパフォーマンスもお見通しだったんだろう。

結局、あたしは彼を転がしてるつもりで、実はからかわれてたんだ。あたしは泣きたくなかったけど、唇を噛み締め必死で堪えた。

視界に映る海が涙でぼやけていった。

やがて、車は駅前の繁華街に到着した。

タクシー乗り場でノブリンは停車させると、ロックを解除する。

さあ、降りると言わんばかりだ。

「悪いな、ミユちゃん。また連絡するよ。とにかく俺はこのまま会社行くから。じゃな！」

あたしの足が地上に着いた途端に、彼は早口でそう言うと、ドアを内側からバン！と閉めた。

すごいスピードで走り去っていくVOXYを、あたしは呆然と見つめるしかなかった。

奇しくも、そこは昨日あたしが車を停めたコインパーキングの傍だった。

自然に昨日の本田君との一件があたしの脳裏に浮かび上がる。
あたしはバッグから携帯を引っ張り出して時間を確認した。

只今、土曜の夜七時。

確か、昨日はもっと遅かった筈だ。

マクドナルドに行けば、彼にまた会えるかも。

会ってどーする？という心の突っ込みは無視して、あたしは再びマクドナルドに向かって歩き出した。

そもそも、本田君に会えるとは思っていない。

偶然は重なるモンじゃない。

二度起つたら、それは必然だ。

土曜の夜に一人にされるのは、虚しすぎて死にたくなる。

本田君がいればいい。

いなかったら、誰かテキトーなのを探すだけだ。

それだけの理由で、あたしは昨日の場所に向かっていた。

果たして。

マクドナルドの看板が視界に入ってきた時、あたしの胸はドキんと高鳴った。

まだ営業している隣の店舗（古着屋だったようだ）の前に、見覚えのある黒いスクーターが停まっている。

そこにいるであろう彼を求めて、あたしは足を速めた。

期待 2

速くなる鼓動を感じながら、あたしはマクドナルドのガラスの自動ドアを通り抜けた。

目の前のカウンターに並んだ3人の店員が「いらっしやいませー！」と無駄なスマイルと大きな声で挨拶してくれる。

が、今回の目的はハンバーガーではなかったので、あたしはそれを無視して二階に続く階段に直行した。

狭い螺旋状の階段を駆け上がると、昨夜と同じ風景。

ただ、今日が土曜日だという事で、昨日よりは少し客が多い気がする。

本田準一は昨日と同じ場所で座っていた。

暗い窓の外を眺めながら、頬杖をついてボンヤリしている。まるで、誰かと待ち合わせしているみたいだ。

・・・もしかして、あたしを待っていてくれたのかな？

そう思ったかっただけど、彼が昨日と同じモスグリーンの工業系作業着を着ているのを見て、今日も仕事帰りなんだって分かった。

あたしはゆっくり近寄ると、窓の方を向いてる彼の肩をチョンとつつく。

ビクッと肩が揺れて、本田君は反射的にクルリと顔をこちらに向けた。

その驚いた顔が、あたしを認めると柔らかく綻んで、声の無い笑みを浮かべる。

嫌がってなさそうなのを確認したあたしは、昨日と同じように、テ

ーブルを挟んだ反対側の席に座った。

「偶然だね。ここ、仕事帰りにいつも来るの？」

あたしが先に聞いてやると、彼はウン、と頷いて椅子に乗っていた黒いリュックからA4サイズの大学ノートを引き張り出した。そのノートに胸ポケットから出したボールペンでサラサラと書いていく。

『偶然ではない。ここで会えるかと思って待ってた。今日。仕事終わってからずっとここにいます』

彼のメッセージに、あたしは嬉しくなっと思って微笑んだ。

筆談用のノートまで持参しているんだから、あたしと会うことを想定して待っていてくれたと思っていいだろう。

あたしが表情を崩したので、彼もホツとしたように笑みを見せた。ペンをクルクルつと指の周囲で回してから、再びノートに書き始める。

『昨日はごめん。あやまりたかった。みゆきがイヤとかじゃない。オレは精神に問題がある。いろいろあってそういう行為が苦手。ごめん。今でも好きだというのはうそじゃない』

彼の言いたい事が箇条書きで文章化されると、分かりやすいような、分かりにくいような……。とにかく本田君が言いたい事は伝わったので、あたしは彼が心配しないように笑顔を作った。

「いいよ。あたしもゴメン。色々あって、あたしも拒絶されると凹んじゃうの。でも、昨日は会えて嬉しかったんだよ？」

『オレも』

そう書いてから、ノートをあたしの前に突き出して見せる彼は本当に嬉しそうで、邪気のない笑顔を見ているところまで穏やかな気持ちになれた。

『お腹すいてない？なんか食べる？』

再びノートに書いてあたしに見せると、彼は席を立って床を指差す。一階のカウンターを指しているらしい。あたしは首を横に振った。

「大丈夫、今、お腹減ってないの。お昼にイタリアンバイキング食べ過ぎて……。」

そこまで言うてから、あたしはさっき別れたノブリンとの今日の情事を思い出した。

本田君には知られなくなかった。

あたしの素行の悪さがバレたら、逃げてしまっくに決まっている。彼はそれについてはコメントすることなく、またノートに書き始める。

『じゃ 出ない？ デートしよ』

ノートを見せてから、彼はあたしに右手を差し伸べた。

嬉しそうな、少し緊張したようなその面持ちに、あたしまでドキドキしてしまう。

「……いいよ。」

小さな声で応えてから、あたしは彼の手をそつと握った。

外は寒かったが、風が止んだせいで少しは緩和されていた。海が近いこの街は、冬場の風の強さがハンパではない。この時期には珍しい程の風のない夜の街を、あたし達は中学生みたいに手を繋いで歩いた。

並んで歩くと、彼はあたしよりずっと背が高かった。

痩せているのが可哀相なくらいだけど、さっきのノブリンの中年太りに比べたら遥かに健康そうだ。

考えたら、本田君はあたしと同じ23歳なんだ。

こんなに若い男性と付き合った事は、今までになかったかもしれない。

妙にドギマギしている理由がやっと分かった。

お金やセックスが絡まない純粹な恋愛に、あたしは全く慣れてなかった。

彼はあたしの歩幅に合わせるようにゆっくりと歩いていく。

時々、あたしの顔を覗き込んで、優しい笑みを見せる。

言葉がない分、彼は全身を使ってあたしを気遣ってくれるのが嬉しかった。

それが、逆に彼にとっては面倒なんじゃないかって心配になる。

「本田君、気を遣わなくていいよ。あたし、喋れなくても気にしないし。」

安心させるつもりでそう言ってみたけど、それは真実だった。初めから体目的で出会う男性なんか、まともな会話もしないで終わる事も多かった。

本田君は少し考えて、手に持ったままだったノートを開くとまた書き始める。

『オレはミユキと話せなくてツライ デートだから気のきいたこと言いたい ミユキを笑わせたい つまらなかつたらゴメン』

箇条書きの彼の本心は、あたしの胸に突き刺さった。

一番辛い思いをしているのは本田君なんだって、改めて思い出した。

「大丈夫。昔みたいで楽しいから。デートだもん、ね。」

腕に巻きついたあたしの頭を、彼は嬉しそうに笑ってクシャッと撫でた。

そして、新たなメッセージを書いてあたしに突きつける。

『デートなら名字でよぶのヤメテ 名前でよんでよ オレ準一だけどおぼえてる?』

「分かった。じゃ、準一。デートしよっか?」

あたし達は腕を組んで、普通の恋人同士みたいに笑いあった。

リセット 1

駅の前からバス停に至るまでの小さな空間には、小さいけれど噴水があつて、それを囲むように並んだベンチにはカップルが座っている。

クリスマスを意識してか、この田舎の駅前でも並木にはイルミネーションが施され、それなりに雰囲気を作っていた。

あたし達は手を繋いで、イルミネーションが反射する噴水まで歩いてきた。

傍から見たら、おそらく異色のカップルだ。

工場からそのまま出てきたような作業着姿の準一に、いかにも遊んでそうな厚化粧のあたし。

あたし達がまさか同級生だとは誰も気が付かないだろう。

幸い、夜の闇とクリスマスモードで光り輝く街並みのお陰で、あたし達は人目を気にすることなく歩く事ができた。

カップルが並ぶ噴水の前のベンチにあたし達は腰を下ろした。

噴水の水音に混じって、どこからかストリートミュージシャンの下手なアコースティックギターの音が聞こえてくる。

しけた街だと思ってたけど、それなりにロマンティックだ。

それは、あたしの隣に座っている準一の効果だという事も否定できなかった。

経験は豊富なあたしだけど、まともに「好きだ」と言われたことなど今までになかった。

今まで付き合いのあつた男どもはみんな体目当てで、恋愛感情を持たれたことなんか無い。

彼に正面から「今でも好き」と言われて、あたしは実は嬉しかった。

それが昔のあたししか知らなかったからだとしても。

ベンチに並んで座ったまま、あたし達は黙って前を向いたまま噴水を眺めた。

「きれいだね。」

光る水飛沫を見つめてあたしがそう言うと、彼はさっきからずっと手放さない大学ノートを広げて、また何か書き始める。

『今日 また会えてうれしい 怒ってしまったかと思ってた オレに会いにきてくれたの?』

あたしはグッと返答に詰まった。

まさか、浮気がバレたセフレに駅前に置き去りにされたから、とは言えない。

あやふやな笑顔を作って、あたしは適当な返事をした。

「ま、まあね。怒ったのは悪かったわ。ごめんね。きっと準一にも色々事情があるんだよね?」

準一は深刻な顔になって、ペンをクルクル回しながら考え込んだ。

考え込むと無意識にやっってしまうみたいだ。

宴会の一発芸くらいにはなりそうな見事なペン回しに、あたしは見とれてしまった。

『いろいろあってオレは精神がこわれてる きらわれるのが怖いからいいたくない オレは昔とちがう』

しばしの沈黙の後、ノートに書かれたその言葉にあたしは首を傾げ

る。

精神に問題があるってさつきも言ってたっけ。彼に一体、何があったのか。喋れない他に何かがあるのか。

「……でも、言いたくないんだね？」

そう聞いてやると、彼はコクンを首を縦に振った。

昔と違うのはお互い様だって言ってやりたかったけど、嫌われるのが怖いのはあたしも同じだった。

あたし達が今、共有しているのは、中学3年生の時のあの3ヶ月の思い出だけなんだ。

その後、彼がどんな目に遭って、どんな風に変ったか、あたしには分からない。

同時に、苛められっ子だったあたしが、どっだけ遊んできてどんだけ汚れちゃったか、準一には想像もつかないだろう。

なのに、嫌われるのが怖くて、お互いの闇の部分曝けさせない。

それなら、言わなければいいじゃん。

あの頃の思い出だけで、これから二人で歩き出せない？

都合のいいことを考えて、あたしは彼に体を寄せた。

「言わなくていいよ。あたしも聞かない。その代わりに、準一もあたしの事、聞かないでくれる？」

彼は一瞬、意味が分からないように首を傾げた。

が、すぐにノートにサラサラと書き始める。

『きみがそう希望するなら オレは聞かない ミユキはミユキだでもそれってどういう意味?』

「どういう意味って?」

『お互い聞かないって条件なら オレと付き合ってくださいですか?』

ノートをあたしに見せてから、彼は照れたように笑ってペンを回した。

長いボサボサの前髪がかかった顔が赤くなっているのは、イルミネーションのせいではなさそうだ。

中学生に戻ったみたいなた純粋な告白に、あたしはドキドキして彼を見つめる。

何で、こんなにドキドキしてるんだろう。

あたし、こんなキャラじゃない筈なのに……!

ノブリンが見たら、「何、かわい子ぶってんだ」って大笑いしそうなほど、あたしは緊張で固まっていた。

「……あたしで良かったら……。」

オズオズと言ったあたしの言葉に、彼は男の子みたいにガッツポーズをして見せる。

そしてノートの見開き2ページを使って、大きな字で書き殴った。

『やったああ!』

もはやコントのような彼のリアクションには、笑いのセンスさえ感

じる。

思わず笑ってしまったあたしの顔を、彼は嬉しそうに見つめた。

『でも オレたち別れてなかったよね 中学生のときから また やりなおしたい みゆきとなら 昔にもどれる気がする』

見せられた大学ノートの文字を読んで、あたしは泣きなくなつた。あたしも準一となら、やり直せる気がした。

中学校の冬休みから停まつてた二人の時間を、あたしは取り戻したかった。

その空白の時間にお互いが持った傷については、できれば触れないままで。

「あたしも。昔に戻りたい。一緒にやりなおそう?」

そう言つて、あたしは彼の肩に顔をくつつけた。

骨ばつた広い肩。

彼は黙つたまま、あたしの長い髪をすくつて抱き寄せてくれた。

リセットすればいい。

中学校で停まつてた時間を、今から取り戻せばいい。

それが簡単では無い事に、浮き立ってるあたしはまだ気付いてなかった。

リセット 2

中学生みたいな「これから付き合います」宣言をしたあたし達は、その夜、名残を惜しみながら別れた。

ベッドインせず、その日の内に帰ってくるなんて、今までのあたしには考えられない事だった。

その理由は二つ。

昨夜の気まずい雰囲気を出して、彼のアパートには何となく行きたくなかった事。

そして最大の理由は、昼からホテルで過ごしたノブリンとの情事の痕跡が体に残っている事が心配だったからだ。

アパートに行ったからと言って、必ずセックスする訳じゃないかもしれない。

でも、あたしの経験上、何もしないで夜を共有する事は有り得なかった。

イルミネーションが反射する噴水の水面はキラキラ光っていて、あたし達を祝福してくれているようだった。

・・・なんて、柄でもない事を思ってしまったのは、あたし達の心が完全に中学生の時にトリップしていたからに違いない。

噴水の光に照らされた準一の顔は、恥ずかしそうで、でも真剣で、とても嬉しそうだった。

女の子みたいだった昔の面影は残っているものの、あたしを見下ろすくらい大きくなった今の彼は、骨ばってるけど逞しくて、一人の男へと成長していた。

彼の目には、苛められっ子だったあの頃のかわいいミユキちゃんが映っていた事だろう。

例え、外見はイケイケバカ女だったとしても。

『明日会える？ 仕事休みだから デートの続きしたい』

別れ際、彼はそう書かれた大学ノートをあたしに見せた。

日曜日にデートなんて、学生の時以来だったあたしは、ちょっとドキドキしながら頷いた。

「いいよ。どっか行く？車出そうか？」

『歩いて中学校に行きたい ベタだけど 一緒に通学路歩きたい ダメ？』

彼は照れ臭そうに、髪をかき上げながらノートを見せた。それが微笑ましくて、あたしも思わず顔が緩む。

「いいよ。じゃ、セーラー服着てこようか？ジャージがいい？準一も学ランで来てよ。」

冗談に決まってるのに、あたしがそう言うと彼は本気で顔を赤らめた。

慌ててノートに殴り書きをして、突き出してみせる。

『学ランもう無理 大きくなってサイズがあわない でもミュキはセーラー服でいいと思う』

「・・・バカ。冗談に決まってるでしょ。あたしだって無理だよ。」

彼の生真面目さはあの頃のままらしい。

更に赤面している準一がかわいくて、あたしは笑った。

最終バスで自宅に帰ってきたあたしは、まずバスルームに直行した。脱衣所の全身鏡でチェックすると、やっぱり体中にノブリンのつけたキスマークが点在していた。

今夜の別れが間違いじゃなかった事に、あたしは安堵する。

ホテルでシャワーを浴びたばかりだったので、5分ほど湯船に浸かってからさっさと出た。

いつものジャージを着てからキッチンに忍び込み、何か食べれるものはないか探してみる。

夕飯はとくに終わってたが、几帳面な母親は残り物は必ずタッパ―に取っておく。

それは翌日の朝、再び登場するのだが、深夜に帰ってくる事が多いあたしにはありがたい事もある。

夜食としてこっそり頂戴する事ができるからだ。

大手メーカーの重役の父親と専業主婦の母親、あたしと違ってデキのいい地方公務員の兄貴がこの家には住んでいる。

一般家庭より若干カタそうな家族構成にも拘らず、あたしは自由奔放にやっていた。

両親はあたしには全く期待していなかったの、深夜に帰って来ようが、泊まって来ようが何も言わなかった。

いや、最初は言い過ぎたくらいだったけど、あたしが全く耳を貸さなかったので諦めたんだろう。

テキトーな男見つけてさっさと嫁に行つて欲しいというのが本音かもしれない。

冷蔵庫からタッパ―に入っていた手羽先の唐揚げを発見して、レンジで温めてからかぶり付く。

明日の朝食には多めに残っているのを見ると、あたしの分まで

用意していたのかもしれない。
そう言えば、今日は家族と顔を合わさず家を出たんだっけ……。

「美由紀、帰ってんのか？」

突然、階段の方から低い声が出て、あたしは手羽先を咬えたまま飛び上がった。

顔だけ声の方向に向けてみると、あたしと同じくジャージ姿の兄貴が柱にもたれて突っ立っている。

傍から見たらイケメンの部類に入るのであるがこの兄貴とあたしには、共通項が全くない。

性格的にも合わない事はお互い自覚している。
露骨に嫌な顔をして、あたしは兄貴を睨んだ。

「博史ひろしこそまだ起きてたの？何か用？」

「うるせえ、お前なんか用はねえよ。」

用はないと言いながら、博史はあたしが座っているダイニングテーブルの反対側の椅子に座り込んだ。

更に嫌な顔をして、あたしは正面に座り込んだこの兄貴の顔を呆然と見つめる。

向かい合って座った事なんか、何年か前の親戚の法事の時からだ。

兄貴は手場先にかぶり付いているあたしを、軽蔑したように見下ろして溜息をついた。

「お前な、どこで何やってるのかは聞かないけど連絡くらいしろよ。母さん、心配してんだぞ？」

「博史に関係ないじゃん。ほっといてよ。」

博史の秀才顔がムカっとして赤面した。

あたしも負けずに眉間に皺を寄せる。

「生活リズムを乱すヤツがいると家族が迷惑すんだよ！」

「あなたに迷惑かけてないじゃん。何よ、エラソーに！あたしの事なんかどうでもいいくせに。」

「ああ、俺はお前の事なんてどーでもいいんだよ！親が可哀相だつて言ってるのが分かんねーのか、このバカ女！」

「はあ！？あなたにバカ女って言われる筋合いはないんだけど？自分だっていい年した男のクセして実家にはびこってるパラサイトじやん。嫌なら出てけば？」

「うるせえよ！てめえはパラサイトどころか害虫じゃねえか。どうせ男と泊まってんなら、体で払って家住まわせてもらえよ。」

「・・・サイッター！」

激昂したあたしは、手羽先を一本掴んで博史の顔に投げつけた。ヒョイと軽く頭をずらした博史の顔を掠めて、手羽先は床に落下した。

同時にあたし達はガタガタと立ち上がって、テーブルを挟んで睨み合う。

「・・・親に心配かけんな。自由にやりたいなら出てけ。俺が言いたいのはそれだけだ。」

低い声で博史はあたしに言つと、くるりと背を向けてキッチンから出て行った。

・・・ムカつく！

でも、あたしの事が家族内で問題になっている事は、彼の口振りから理解できた。

リセット 3

いいカッコしいの博史のお陰で、あたしは最悪な気分で寝る羽目になった。

そりゃ、親が心配してるのは分かってる。

だからと言って、パラサイト博史にあんな言い方をされる謂れは全くない。

あいつこそ、さっさと結婚して家出てけばいいのに……。

自分のことは棚に上げて毒づいている内に、あたしは眠りにつき、目覚めた時には既に太陽が昇っていた。

無意識に時計を見るともう9時を回っている。

何か大切な用事があったのを思い出して、あたしは寝ぼけた頭を必死で働かせた。

そうだ、準一と約束したんだっけ。

朝の10時に中学校の校門前で待ち合わせだった筈。

あたしはベッドから飛び降りて、ジャージを勢い良く脱いだ。

今日は「中学時代に戻りたい」という準一の希望により、カジュアルな装いにする。

ジーンズにシンプルなTシャツ、ユニクロで買った防寒対策用モコモコのパーカー。

あたしにしてはボーイッシュなスタイルだ。

鏡で全身をチェックした後、あたしは部屋を飛び出した。

何かお腹に入れようとキッチンに立ち寄ってみると、流し台に向かっている母親が目に入った。

……親に心配かけんな。

昨晚の兄貴の言葉が脳裏を掠める。

が、あたしは、そ知らぬ振りでキッチンに入った。ダイニングテーブルに置いてあったロールパンの袋を掴んだ時、気配に気付いた母親がクルつと振り返った。

「美由紀、いつ帰ってきたの？昨日はどこで食べてたの？お母さん、夕飯の用意して待ってたのに・・・。」

来ると思った。

博史が突然、変な事を言い出したのには、何かがあったに違いないからだ。

あたしは首を竦めて、曖昧な笑みを浮かべる。

「友達の所。連絡しないでゴメンね。じゃ、今からあたし出かけるから。」

「・・・美由紀、お父さんが話があるって言ってるの。今日は早く帰って来れない？」

「分かんない。帰る時に電話するよ。」

お説教が始まる気配を感じて、あたしはロールパンを口に啜えてキッチンから出た。

父親が話しをしたって何だろう。

ま、あたしにとっていい事ではないのは確かだ。

嫌な事は後回しにする主義のあたしは、そのまま洗面所に向かった。今日は睫毛はやめてナチュラルな感じに顔を作らなくては。

あたしにとって親の小言より、自分の本日の顔を作る方がよっぽど重要事項だった。

自宅から歩いて15分くらいの所に、あたしと準一が通った中学校

がある。

職場と方向が違つたので、近寄る事もなかった。それが準一を忘れていた要因の一つでもある。

久し振りに通い慣れた通学路を歩いてみると、否応なくあの頃の思い出が蘇ってきた。

柄にもなく、せつない気持ちになって、あたしは空を見上げる。

風の強いこの街に、今日は更に冷たい風が吹き付けていた。

もうすぐ12月。

クリスマスも近いんだから妥当な寒さだ。

やがて、中学校の校舎が視界に入ってきた。

あの頃は大きいと思っていた校門の鉄の柵が、意外にも小さくて不思議な気分になる。

そして、市立東郷中学と書かれた大きな石の看板にもたれている人細くてひよる長いシルエットは、間違いなく準一だ。

腕時計を見ながらキョロキョロしているのは、あたしを探してるんだろう。

子供のデートみたいに準一が待っていてくれたのが嬉しくて、あたしは早足で彼の元に向かう。

「準一！おっはよ！」

駆け寄って来るあたしの姿に気付いて、彼は笑顔を浮かべながら、既に小脇に抱えていた大学ノートを開いてみせる。

見開き2ページを使って『おはよう』と色を使って書かれている。使いそうな言葉は先に用意しておいたらしい。

準備が良すぎる彼に、あたしは大笑いしてしまう。

何故あたしが笑い転げているのか分からない様子で、準一は首を傾げた。

2日続けて見た準一は、工場の作業着姿で疲れた印象だった。その姿は例えるなら野麦峠の女工だ。

彼自身が痩せ型なせいもあるが、働いても這い上がれないワーキングプアを体現しているようだった。

だけど、さすがに今日は私服を着ており、前日より若く見える。

黒いタートルネックに寒色系のチェックのネルシャツ、シンプルなストレートジーンズにスニーカー。

本当に中学生みたいな装いだ。

ひよる長い彼の体型に、少年っぽい服装は良く似合っていた。

『何かおかしい?』

「・・・可笑しくない。準一、変ってないね。その天然の生真面目さ。」

あたしの褒めてるのかどうか分かりにくいコメントに、彼は再び首を傾げた。

「いーのいーの。忘れて。ね、今からどこ行く?残念だけど中学校は今日入れないみたいだね。」

誰もいない校庭を見つめて、あたしは彼の顔を覗き込む。

大抵、子供のサッカーチームなんか練習していて校門は開け放されてる筈なのに、今日に限って誰もいない。

いい大人が二人で校門を這い上がって不法侵入するのは、さすがに気が引けた。

彼は少し上を向いて考えた後、ペンをクルッと一回転させてノートに書き込む。

『オレが住んでた団地　いつしよにきてくれる?そこでオレは声を

失った 今どうなってるか見たい』

・・・いきなりヘビィなの来た・・・。

言葉に詰まって、あたしは彼を見上げる。

声を失った場所、つまりは暴行されて瀕死の状態で見られた忌まわしい場所じゃないのか。

彼と付き合ってた事は、彼の背負ってる過去やトラウマにも向き合
うって事になるんだ。

そこまでの覚悟は当然なかったあたしは一瞬怯んだ。

だけど、縋ってくるように見つめる彼の目力に逆らえる筈もなく、
しばしの沈黙の後、あたしはコクンと頷いた。

過去 1

冷たい風が吹いてはいたが、空は澄み切って晴れ渡り、清々しい日だった。

車なしの学生デートをするには若干寒さが堪えるが、まずまずの日和だ。

東郷中学校前から、あたし達は準一の希望通り、彼が住んでいた市営住宅に続く通学路を手を繋いで歩き出した。

こんな片田舎では、いい年した男女が歩道をノコノコ歩く姿は滅多に見られない。

年寄りでも自転車感覚で車の運転をするこの地方では、若者が道を歩く事は殆んどない。

そう言うあたしだって、寒空の下、自分の足で歩くのは久し振りだ。つまり、あたし達は結構目立っていたに違いないが、内気だった準一が案外堂々とあたしの手を引いていくので、大人しく従うしかなかった。

そして、見栄っ張りのあたしにしては、それが嫌ではない事に自分でも驚いていた。

準一は時々、あたしの顔色を窺うように体を屈めて近づく。

細面のシャープな輪郭に、優しそうな目元が少しアンマツチだ。

でも、その目が意外と睫毛が長かったり、男性にしては色白で肌がキレイだったり、女の子っぽかった面影はあちこちに垣間見える。

「準一って、案外カツコ良かったんだね。あの頃は女の子っぽくて、あたしと同じくらいの大きさだったのに。職場でモテるんじゃないの？」

冗談めかして言っていると、彼は心外だというように目を見開いて

首を横に振った。

「モテないの？」

『もてるわけない 声かけれないのに それにオレはかつこよくない』

後ろ向きで歩きながら、準一はノートに書き殴って、あたしの前にドンと突き出す。

自虐的な発言を何故か威張って見せるのが可笑しくて、あたしは笑った。

それがまた理解できないように、彼は首を傾げる。

『オレ またヘンなことだった？今日はよくわらうね』

「バカね。そういう所が可笑しいの。」

理解はできないものの、あたしが笑っているのが彼には満足だったようで、笑みを浮かべるとまたノートに書き出す。

『みゆきが笑ってくれるならいい オレはおもしろいこといえないから 疲れてきたらえんりょなくいつて』

「大丈夫。面白いよ。準一といると楽しいし、喋らなくても平気」

彼を安心させようと言った事だったけど、これは本当だった。

準一といると喋らなくても落ち着くのだ。

あたしは元来、社交的な女ではなくて、寧ろ無口で孤立するタイプだ。

それ故、何度もイジメの対象になってきた訳なんだけど、よく喋るようになったのは、ネットで男を探すようになってからだ。

テンションを維持する為、つまらない女だと思われぬように、相手に合わせて話題を作ることも上手くなってきた。でも準一とは駆け引きは必要ない。

何しろ、彼はあたしの体を求めてないのだから。

でも、いつか・・・いつかだけど・・・。

彼に抱かれて目覚める穏やかな朝がくるのだろうか・・・？

その絵が突如頭に浮かんで、あたしは一人で赤面して顔を両手でパンパンを叩いた。

意味が分からない準一は、不思議そうな顔であたしのリアクションを見つめて首を傾げる。

その日に出合った男と、いきなりラブホに直行してたこのあたしが、考えただけで動揺するなんて。

でも、甘い考えはまだ持つべきではない。

何しろあたしは、初日に拒否されている。

その理由が、彼の抱えるトラウマによるものなら・・・。

準一は後ろ向きで歩きながら、黙ってしまったあたしを見つめている。

喋れない分、彼はあたしの考えている事が聞こえているんじゃないかって心配になって、あたしは口を開いた。

「準一、あたしが考えてる事、分かる？」

『想像はつく、どうしてもオレがそーゆー事したくないのか、みゆきはずっと考えてる、そんなに知りたい？』

ズバリ言い当てられて、あたしは少し怖気づきながらも首を縦にコクンと振った。

言いたくないと言われても、付き合う以上、これを避けて通る訳に

はいかない。

何しろ、あたしはセックス依存症だ。

『付き合ってくれっていったクセに 言わないわけにはいかないよね でもきらわないでよ』

彼はそう書いたノートをあたしに見せると、そのまま黙ってあたしの手を取って歩き出した。

20分くらい歩いただろうか。

あたし達は10棟程並んだ集合団地の前に来た。

古びた滑り台がポツンと佇む、小さな公園を通り過ぎて、彼はあたしを「6」と書かれた棟まで連れてきた。

始めは白かったであろう壁は、今となっては黄ばんだ地肌。雨の後にうつつすら浮かび上がって、著しく老朽化している。

市内でも有名な低所得世帯が集まる団地だったので、さほど驚きはしなかった。

準一は黙ったまま。遠い目で団地を見つめている。

その唇が動いたのを見て、彼が「カ・ワ・ラ・ナ・イ」と呟いたのが分かった。

凝視しているあたしを見下ろし、彼は少し表情を緩めた。

そして、ノートを広げてまたペンをクルクル回し始める。

何度か書き始めようとしては、ペンを回して、しばらく悩んだ後、やっとノートに書き始めた。

それを見て、あたしは思わず息を呑んだ。

『オレの母親は体売ってこづかいかせぎしてた　時々オレも強要さ
れた　この団地で　けいべつする？』

過去 2

・・・性的虐待。

と、いうことになるのだろうか。

それ自体には、あたしは驚かなかった。

寧ろ、そういう事があつたんじゃないかと予感があつた。

彼が突然いなくなったあの中学三年の三学期、学校内には既にそんな噂が流れていた。

尤も田舎の子供だつたあたし達には、それが実際どういう事を意味するのかまで理解できていなかった。

あたしがショックだったのは、彼がまず母親の事を言い出したからだ。

まず、「体を売ってこづかい稼ぎ」という言葉が、あたしの胸に突き刺さつた。

なぜかつて・・・言うまでも無い。

トラウマになるほど彼が辛かった事を、あたしは現役でやっているのだから。

もし、バレたら・・・という不安が頭をよぎつた。

あたしが彼を軽蔑するどころか、彼があたしを軽蔑して去って行くに違いない。

あたしの沈黙を勘違いしたのか、彼は再びペンを走らせた。

『不愉快な話ならゴメン オレはミユキみたいな普通の家庭でそだつてない 母親は男がいないとダメな女だつた つなぎとめるために何でもやってた 息子のオレまでつかつて』

フォローのつもりで書いてくれる彼の言葉は、皮肉にもあたしを更

に追い詰めていく。

息子はいないけど、あたしは間違いなく彼の母親と同類の女だ。コメントのしようがなくて、あたしは唇を噛み締めたまま、彼の手が紡ぎ出す文章を見つめていた。

『生活保護受けながら 母親は男をかえては金もらってた DVうけたのは 昔 結婚してた男 完全に狂ってた オレはここでその男に殺されかけた』

「・・・もういいよ、準一。」

『ここに来てから何度も暴力ふるわれた 母親がにげて オレは児童施設にいれられた もどってきてやつと中学校にもどれて そしたら 冬休みにヤツはふくしゅうしにきた オレはそいつに』

「ねえ！もうやめて！」

見るのに耐えられなくなって、あたしは思わず彼にしがみ付きノートを奪った。

それを胸に抱き締めて、あたしは彼から守るように後ずさりする。会話の手段を奪われた準一は、困ったように苦笑してペンを回した。あたしが、返さないと言うようにノートを抱いたままブンブン首を振ったので、彼はゆっくり口を開いて声を出そうと試みる。

喉の奥から溜息のような呼吸音が響くだけで、それは声にはならなかった。

それでも懸命に何かを伝えようと口を開閉している準一が痛々しくて、あたしはノートを放り出して彼に駆け寄るとその細い体にしがみ付いた。

悲しいまでに実りの無い彼の試みを、すぐに止めさせたかったのだ。

しがみついたあたしに拘束された準一は、困ったような照れ笑いを浮かべて見下ろす。

その唇が「ゴ・メ・ン」と動いた。

「謝んなくていい。でも、もう悲しい事言っただけじゃないよ。言いたくなかったんでしょ？あたしこそゴメン。もう聞かないから。そういう約束だったんだから、もう言わないで。」

思わずそう言ったのは、彼の為だけじゃなかった。

あたし自身が、彼の背負ってきた闇の部分を支えられる自信がなくて、これ以上聞くに堪えられなかった。

準一はそつとあたしの腕を掴んで体から離すと、10m程先に放り出された大学ノートを取って戻ってきた。

これがないと、あたし達は意思疎通をする事も困難なのだ。

当然の事を思い出して、あたしは目の前にいる彼がとても遠い所から帰ってきたような気がした。

土埃を払うようにノートをバタバタと手で叩いてから、彼は再びノートにメッセージを書き綴る。

今までの筆談の中で一番長い時間だった。

時々、文章を考えているかのように上を見たり、横を見たり、ペンを回したりしながら、準一は懸命に書き続ける。

あたしはその間、バカみたいに彼の手の動きを観察していた。

やがて、ギッシリ書き綴られたノートの見開き2ページをあたしに差し出した。

宿題を提出する子供みたいに、少し緊張した顔であたしを見た後、

「ヨ・ン・デ」と唇が動いた。

駐車禁止の鉄の柵に軽く腰掛けてから、あたしはそれを読み始めた。

『ごめん 昨日まで過去のことは言いたくなかった

きらわれるのが怖かったから

でも、やっぱり考えなおした

オレはまたしゃべれるようになりたいから

声がでなくなったのは あの時のことがトラウマになってる

だから なるべく思い出さないようにしてた

今までは話相手もいなかったから 声がでなくても かまわなかった

それが、ミユキに会って 昨日 話して オレはやっぱりこのまま
じゃいけないと思った

治したい 前みたいにふつうに戻りたい ミユキと話したい

ミユキがついててくれたら オレは変わるかもしれないと思った

だから 昔のこと 聞いてほしかった

へんなこと話してごめん

オレはぶっこわれてるけど ミユキがいてくれたら 大丈夫な気がするんだ

お願いする 一緒にいてください 』

読み終わったあたしの目から涙がポロポロ溢れてきた。

準一は緊張した面持ちのまま、あたしの様子を窺っている。

母親の優しい答えをドキドキしながら待ってる子供みたいだ。

彼の傷ついた心を、汚れ切ってるあたしが癒せるのかは分からない。そもそも彼があたしの過去を知ってしまったら、逃げていつてしまいかもしれない。

それでも、こんなあたしで良ければ、彼が必要とする限り傍にいてあげたい。

そう思つて、あたしは準一をギュッと抱き締めた。

それが答えだと分かった準一は、やっと表情を和らげて、声のない笑みを見せた。

過去 3

あたしはしばらくの間、準一の体に両腕を巻き付けてしがみ付いていた。

彼も嫌がりもせず、黙ってされるがままになっていた。

彼の胸にくっついたあたしの耳に、熱と鼓動が伝わってくる。

時が止まったみたいなたまな静寂の中で、あたしはただ、彼の体温を感じていた。

やがて団地の一階の一室から子供の手を引いた女性が現れ、抱き合っているあたし達をギョツした顔で見たので、彼は真っ赤になって慌ててあたしの体を押し返した。

今だに中学生みたいな彼のリアクションに、あたしは泣きながら笑って、嫌がらせのようにまたしがみ付く。

「照れる事ないじゃん？あたし達、付き合いだしたんでしょ？」

『ゴメン オレは慣れてない まだはずかしい ミユキはモテるだろ？』

「は？あたし？」

突然、自分の事に触れられて、今度はあたしがギクツとして退いた。慣れているけど、モテるかと言えば違う気がする。

真剣に告白された事なんか今まででなかったし。

相手から言われて、まともに恋人として付き合い事になったのは、これが初めてかもしれない。

つまり……。

「・・・モチなかつた。準一くらいだよ、あたしが好きだなんて言ってくる物好きなのは。」

ブスつとして頬を膨らませたあたしを、彼は何故か嬉しそうに笑って引き寄せると、来た時のように手を握って歩き出した。

「・・・もう、いいの？ここ来て、気が済んだ？」

手を引つ張られながら、先を歩く準一の背中にあたしは問い掛ける。彼は、「ダ・イ・ジョウ・ブ」と唇を動かし、親指を立てた。

何が大丈夫なのかよく分からないけど、彼の心の中で何かが整理できただろう。

彼の背中に、来た時には無かった自信のような強さが感じられた。

・・・こんなあたしでも、彼の支えになれたのかな？

自惚れだったかもしれないけど、あたしはそう思ってた嬉しくなった。冬空の下、あたし達は手を繋いで寄り添って歩いた。

彼に触れている肩や手はとても温かくて、冷え切ってたあたしの心までほんわりと心地良い。

・・・もつと、彼を近くで感じたい。

もちろん言葉にできずに、あたしは彼の顔を見上げて一人で赤面する。

すぐにこんな事を考えてしまうのは、やはりあたしが依存症なのか？もしくは、ただの変態なのか？

それとも、もう夢中になるくらい準一の事を愛してしまったのか・・・？

あたしがそんな事を妄想していることなど、よもや考えていないだろう準一は、あたしの顔を見下ろしてニッコリ笑った。

その後あたし達は 当時よく立ち寄った学校前の駄菓子屋で 当時の人気商品だったヤキソバパンとコロツケパン、200mlパックの牛乳を買った。

今度は あたしの家に続く通学路を歩きながら、昨日あたしがノブリンと待ち合わせしていた小さな公園に辿り着いた。

この寒いのに、公園には半ズボンの子供達がサッカーをしていて、あたし達はベンチに座ってそれを観戦しながらランチを始めた。相変わらず、準一は何も話さない。

あたし何も聞かなかつた。でも、彼の心の内を聞いた後のこの沈黙は、前にも増して心地良いものだった。

コロツケパンを啜えている彼の横顔を、あたしはチラリと見上げる。意外に敏感な彼は、あたしが凝視しているのに気付いて、同じようにチラリと見下ろす。

目が合ったのが気恥ずかしくて、あたしはオタオタしながら視線を逸らした。

・・・何なの、この少女マンガみたいなシチュエーションは？

柄にもなく照れている自分が、別の人間みたいに思える。

あたしの不審な行動の意味が分からなくて、準一は首を傾げながら曖昧な笑みを浮かべた。

その顔を正視できなくて、あたしはヤキソバパンに齧り付いた。

ヤバイ。

完全に好きになってる。

そう自覚したのは、冬の早い夕暮れが近づく頃だった。

そろそろ帰る時間だとノートに書いてきた彼に、あたしは首を横に振った。

まだ彼と離れたくなかった。

家の近くまで送ってきてくれた彼の手を、あたしは離す事ができずにこねくり回す。
困った顔で苦笑しながら、準一は仕方なく片手で器用にノートを開く。

『明日 仕事が終わったらマクドナルドで待ってる だから 今日
は帰ろう』

「ヤダ！まだ今日は終わってないじゃん！もう少し一緒にいようよ。」

初日と同じようにダダを捏ねてしまう学習のない自分に嫌気が差すが、そんなプライドも維持できないくらいあたしは彼と離れたくなかった。

『でも もう遅い ミユキの家族が心配するよ また明日』

「大丈夫だよ、ねえ！もう少しだけ。」

『ダメ』

なかなか強情な準一は、どうしても首を縦には振らなかった。

この年になつて門限5時とか、有り得ないのに。
中学生の時から時が止まっている準一には、思春期の女の子を遅くまで引き止められないという信念があるようだ。
不服ではあったが、彼があたしをおぼこい女の子扱いしてくれるのは悪い気はしなかつたので、渋々頷いた。

「じゃ、お別れのキス。してくれる？」

仕返しに背伸びをして、彼の前で目を瞑つてやる。

しばらく待っていたけど、彼はやっぱり応えてくれなかつた。

薄目を開けて彼の顔色を窺うと、申し訳なさそうな、悲しそうな、複雑な表情の顔があつた。

取り繕つように、慌ててノートを広げる手を、あたしは遮る。

「・・・冗談だよ。ゴメン。焦らなくていいから。じゃ、明日仕事終わった頃、マクドナルドで待つてる。」

あたしの言葉に、彼は安堵した顔で嬉しそうに笑つた。

同居 1

準一は駅前に停めつ放しのスクーターを取りに行くからと、バス停に向かつて去っていった。

車で送ろうかと言ったあたしの申し出は断わった。

女の子の車で送られたくないというプライドを持っているのかもしれない。

そう思って、あたしもしつこく言うのを止めた。

久し振りの徒歩デート。

今まで知らなかった彼の事が少し分かったのと、ついでに自分の気持ちも分かってしまった。

楽しかったね。

明日も会いたいよ。

そんなありきたりな会話さえもできないあたし達だけど、その時、

あたしの心は不思議な程満たされていた。

無言のまま手を振って去っていく彼の細長い後姿を、見えなくなるまであたしは目で追いかけた。

築20年、木造2階建ての自宅が見えた時、時刻は6時近かった。

冬至前の真つ暗な空には既に星が瞬いている。

強くなってきた風が顔を突き刺して、あたしはポケットに両手を突っ込んだまま、家に向かつて駆け出した。

「……ただいま」

小さな声で一応そう言ってから、あたしは玄関に入る。

その途端に、カレーの匂いが鼻を掠めて、あたしは自分が空腹だったのを思い出した。

今日はカレーか、なんて考えながらスニーカーを脱いでいると、背後に人の気配がした。

「美由紀、ちょっといらっしやい。お父さん、話があるって・・・。」

「

背後にやってきた母親が話し出すのと、ビックリしたあたしが振り返るのは、ほぼ同時だった。

ジャストタイミングでそこに立ってたという事は、あたしが帰ってくるのをずっと待ってたんだろう。

そう言えば、確か出かける時も話があるとか言いかけてたっけ・・・。

嫌な予感を感じつつ、あたしは眉間に皺寄せて母親を見上げた。

「えー、何、話って？あたし、お腹空いてんだけど？今じゃなきやダメ？」

「ダメ。お父さん、もう昼から家であんたが帰ってくるの待ってたんだから。」

「はあ？昼から？」

何の話か知らないけど、娘の帰りを6時間も自宅待機で待ってたなんてよっぽど暇なオヤジだ。

重役なんて、大して仕事持っていないのかもしれない。

お腹は空いていたけど、母親ののっぴきならぬ表情に気圧されて、あたしは渋々父親の待つキッチンに向かった。

昨夜、あたしが博史と言い争ったダイニングテーブルに、博史が20年くらい年取った風貌の父親が苦虫を潰したような顔で座ってい

た。

・・・こりゃ、何かがあったに違いない。

いい話な訳が無い。

あたしはこっそりとキッチンを通り越して、二階の自分の部屋に向かおうとした。

その時。

「美由紀！待ちなさい。話があるから、ここに座りなさい。」

既に怒りを含んだ父親の低い声が廊下に響いて、あたしは諦めて溜息をついた。

「何か用？」

仏工面でキッチンに入ってきたあたしを、父親は負けなくらい不機嫌な顔で睨みつける。

そして、黒い携帯電話を開きながらあたしの前に突き出した。

その画面を見て、あたしは青くなった。

そこには駅前で男と抱き合っけキスしてゐるあたしが、ハッキリ写っていたからだ。

父親はあたしの反応を見て、更に不機嫌な顔で詰問を始めた。

「これはお前なのか、美由紀？この写真はお父さんの携帯電話に匿名の人間が写メールで送ってきたものだ。

娘さんは売春してますって御丁寧にメッセージまで付いていた。お前は毎晩、遅くまで遊んでゐるらしいが、こういう事を本当にしているのか？」

父親の話聞きながら、あたしは懸命にこの男の事を思い出そうとしていた。

確かノブリンと付き合う前に、駅前でナンパされてホテルに行ったオタク男だ。

ブラブラしてたら声掛けられて、全く好みじゃなかったから5万円って吹っかけてやったのにアツサリ快諾した、金だけは持ってた男だった。

誰かが嫌がらせに撮ったに違いないが、売春をしていた事実は事実なので言い逃れもできなかった。

あたしは唇を噛み締めて、黙って写真を睨む。

「・・・だったら、何？相手だって大人だよ？合意の上なら問題ないじゃん。お金貰ったかどうかなんて、誰が立証できるの？それとも、誰かがお金貰うとこまで見てたの？」

「・・・誰かが見てたんだろうな。しかも、お父さんの会社の人間だ。この写メールはお父さんの部署の人間全てに送られてきたんだ。でも、問題はそこじゃない。お父さんが知りたいのは、お前がこういう事を本当にしているかどうかだ。」

「だから、関係ないじゃん？お父さんだって、娘が売春してたかどうかより、自分が恥かいた事が問題なんでしょ？そんな事、ほっといてよ！」

「やってないって言えないのか？」

「何でそんな事、言わなきゃなんない訳？」

その途端に左頬に衝撃が来て、目の前がチカチカ光った。

何が起こったのか分からなくて、あたしは椅子の背もたれに掴まってよろける体を支えた。

さつきまで座っていた父親が、鬼の形相で立ち上がって右手を振り上げている。

その手はブルブルを震えていて、あたしはやっと頬に熱と痛みを感じ始めた。

お父さんがぶった。

その事実には気が付くのに時間がかかった。

「お前は どうして・・・。いい年して何やってるんだ！？何が不満なんだ？そんなに金が必要だったのか？」

「・・・あたしも子供じゃないんだから。何をしようと勝手に勝手でしょ？どうせ、あたしなんかバカでしょうもないOLで、さっさと出て行って思ってるくせに！」

父親の怒涛の迫力に気圧されながらも、あたしは必死で反撃した。でも、軍配は完全に彼の方に上がっていた。

そもそも彼の言う事の方が正当で事実なんだから。初めてされた平手打ちのショックで、目頭が熱くなって、視界がぼやけてくる。

あたしは最初の涙の一粒がこぼれない様に、ゴシと腕で顔を擦って怒鳴った。

「もういい！出てけばいいんでしょ？あたし、この家から出て行くから！」

完全なるノープラン状態で、あたしは家を出る決意をした。

「美由紀！待ちなさい！話はまだ終わってない！」

「話すことなんてないじゃん！あたしがここからいなくなれば万事OKでしょ？もう、ほっといて！」

父親の怒鳴り声を振り切つて、あたしは階段を駆け上がると、真つ直ぐに自分の部屋に飛び込んだ。

押入れの中から旅行用の大きめスポーツバッグを引っ張り出して、その中にどんどん服を押し込んでいく。

会社の制服と開襟シャツが何枚かあれば、取り合えず仕事には行ける。

後は下着にストッキング、化粧ポーチがあれば何とか生きていけるだろう。

当てもないまま、あたしは家を出る準備をテキパキと進めていった。涙を腕で拭いながら、あたしはパンパンに膨れ上がったスポーツバッグのチャックを閉めて肩に担いだ。振り向いた途端に、開けっ放しのドアの前で突っ立ってた兄貴と眼が合った。

その優等生ヅラを見ただけで、あたしはムカついて思わず罵詈雑言を浴びせかける。

「いい気味だつて思ってたでしょ？あなたの言う通り、あたしここから出て行くから。念願叶って良かったね。これで家族の恥がなくなるし、あんたも気兼ねなくパラサイトできるじゃん。」

「・・・出て行くつてどこ行くんだよ？」

「関係ないし。大丈夫だよ、あんたの言う通り、体で払って男のとこ住まわせて貰いますからね！」

「俺や父さんが言いたいのは、そういう事じゃないだろ。どうしてお前は分かんないんだよ!？」

「何よ!偉そうに!あんたがあたしに何してくれたってのよ?保護者ヅラすんなってんの!」

全く平行線の口論に、博史はうんざりしたように溜息をついて宙を仰いだ。

そしてポケットから名刺を取り出して、あたしの方に差し出す。

そこには彼の職場の部署の名前と、プライベートの携帯番号が書いてあった。

「お前はどうしようもない子供だよ。いいよ。一度、家から出て自力で生活してみな。痛い目に遭ってみるといい。そうすれば俺達が言いたかった事が分かるから。どうしても困った時は、俺に連絡しろ。」

「余計なお世話ですう!あんたなんか連絡する訳ないし!」

「いいから持ってけ!」

急に声を荒げた博史の迫力に、あたしは一瞬ビクっとして黙り込んだ。

体も大きくて精悍な顔立ちのイケメンが本気で怒ると、兄貴とは言えども、ちよっと怖い。

「・・・分かったよ。でも、電話なんかしないからね。」

「用がなければする必要ない。便りが無いのは良い便りだからな。

困った時だけ連絡しろ。」

あたしの手の名刺を押し付けて、博史はそれだけ言うとクルリと背中を向けて階段を降りて行った。

これは、彼なりの愛情なんだろう。

でも、それをありがたく享受するほど、あたしは大人ではなかった。スポーツバッグのポケットに名刺を押し込むと、あたしはスポーツバッグの重さによるけながら部屋を出た。

階段を降りて玄関に続く廊下を通った時、キッチンのドアは閉まっていた。

あんなに怒鳴っていた父親の声はもう聞こえなかった。

博史が激昂している父親を宥めてくれているのかもしれない。

どの道、今までありがとうございました、なんて別れの挨拶なんかするつもりはなかったので、あたしはキッチンをスルーして玄関のドアを開けた。

途端に、さつきより更に冷たくなった真冬並の風が吹き込んでくる。世間の厳しさを暗示するかのような向かい風の中、あたしは車に向かって歩き出した。

それから僅か20分後。

結局、行く当てのなかったあたしは、さつき別れたばかりの準一の住むマンスリーマンションの前にいた。

彼と再会した一昨日の夜、彼のスクーターに誘導されてここまで来た事を思い出したのだ。

あの時、場所覚えておいて本当に良かった。

彼のケータイ番号もまだ聞いてなかったし、聞いていたとしても声の出ない準一と電話で話すのは困難を極めそうだ。

スポーツバッグを担いで、あたしはマンションの階段を二階までよろよろと登っていった。

彼の部屋の前まで来ると、キッチンと思しき窓と換気扇から白い湯気が外に出て行くのが見える。

湯気に混じって焼肉の匂いができて、あたしは思わずお腹を押さ

えた。
思い切つて呼び出しブザーを押すと、ドアの後ろでガチャガチャと
チェーンロックを外す気配がする。

「……………!？」

突然、開いたドアから準一が顔を出して、あたしを見るなりそのまま硬直した。

よほど驚いたのか、声が出ない事も忘れて口をパクパクさせて何かを言っている。

「……………ごめん。また来ちゃった。迷惑？」

「……………」

あたしの言葉に彼はブンブンと首を横に振って、あたしをドアの中に招き入れた。

玄関開けたらすぐキッチンという構造上、コンロの上に乗って良い匂いを拡散しているフライパンがすぐに視界に入った。

見覚えのある半分ベッドに占領されたワンルーム。

あたしは前と同じようにベッドの縁にちょっとだけお尻を乗せて遠慮がちに座った。

準一はしばらく部屋の中をウロウロと歩き回っていたが、やがてデスクの時に持参してきていた大学ノートを見つけてペンで書き始める。

『どうしたの？忘れ物？』

「……………違うよ。準一にお願いがあるの。」

彼は首を傾げて、ん？という顔をしたが、笑みを浮かべてまた書き

始めた。

『何？オレにできること？』

「・・・あたしをここに泊めて欲しいの。あたしもう家には帰れないの。準と一緒に住みたいの。お願い！」

返事の代わりに、準の顔が口を開いたまま硬直した。

声が出ていたら、間違いなく「は!？」と言っていただろう。準一は一瞬、意味が分からないように首を傾げてペンをクルクル回した。

それから、あたしの顔を見てノートをおもむろに開いた。

『帰れないってどういういみ?もしかしてオレのせい?家族になにかいわれた?』

生真面目な彼は、今日のデートが父親の逆鱗に触れたと勘違いしたようだ。

あたしの事をどんだけ箱入り娘だと思ってるんだか。

心配そうに返事を待つ準一に、あたしは両手をパタパタ振った。

「違うよ。準一には関係ない。あたし、昔から家族と仲悪いんだ。ちよつと喧嘩して出てきちゃったから、その、ここにおいて欲しいんだけど・・・ダメ?」

あたしの言葉に間髪入れず、彼はブンブン首を振った。

『ダメだよ。ここは会社が借りてる物件だし。いつまでここにいられるか分からない。契約満了したら追い出されるかもしれない』

「でも、それまでならいいでしょ?お願い!取り合えず今夜だけでもいいの。ね?」

『ダメだって。ワンルームなのにどこでねるつもり?』

「そりゃ、準一さえよければ・・・一緒にでもいいよ?」

「・・・」

あたしは、ベッドをポンポンと叩いて最高の微笑みを見せた。
何と言ったらいいか分からず、複雑な表情で黙り込む彼。

『オレのベッドなんだけど』と書きたいに違いない。
眉間に皺寄せ考え込むほどに、それに比例するような速さでペンはクルクル回り続けた。

しばしの沈黙の後、彼はハっとしたように顔を上げ、急いでノートにメモると自慢げにあたしの前に突き出す。

『ケンカしたなら あやまりに行こう オレもついて行ってあげるよ』

・・・それができるくらいなら、ここに来る筈がない。

考え抜いた末に出てきた結論に、あたしはガツカリしてキイキイと反論を始めた。

「ムリムリ！ウチのお父さん頭固いんだから。っていうか、謝るつもりはないんだって。ただ、一晩泊めて下さいって言うてるんだよ！明日には出て行くから。今晚だけ、お願い！」

『お父さんとケンカしたの？理由は？』

「え、理由？そんなの・・・言えないって。ほら、思春期の反抗期だからさ！大した理由はないって。よくあるじゃん、中学生日記でさ。」

支離滅裂になってきたあたしの話に、準一の顔はどんどん険しくなっていく。

無理もない。

自分でも何言ってるのか分からなくなってきた。

だからと言って、まさか出会い系サイトで会った相手からお金取って、それが父親にバレたなんて言える訳ない。

『思春期はとつくに過ぎただろ？何かくしてんの？本当のこと教えてよ』

「あたしの事、聞かないって言ったじゃん！あー！もう！いいよ。そんなに言うなら準一には頼まない！急にお邪魔してゴメンね。さよなら！」

ついに逆切れしたあたしは、呆気に取られる彼に怒鳴った。

準一が生真面目で、時々融通が利かないほど強情だったのを忘れていた。

一晩くらい軽自動車の中で寝ればいいと思って玄関で靴を履いた時、肩をグッと掴まれた。

振り返ると、準一が苦笑しながらあたしを見つめている。

「・・・何よ？」

『よく分からないけど 困ってるならほっとけない 同じベッドでよければ とまる？』

サラサラっとノートに書かれたメッセージに、あたしは思わず目を潤ませた。

地獄に仏。

捨てる神あれば救う神ありだ。

田舎で一晩の宿を頼むTV番組の売れない芸人の気持ち、これほど身に染みて分かった事はないだろう。

あたしは思わず彼に飛びつき、細い体にしがみ付いた。

「ありがとう、準一！ホントに助かったよ。しかも、あたしお腹空いてるんだ・・・。」

コンロの上に置きっ放しのフライパンが視界に入って、あたしのお腹が変な音を立てた。

・・・しょうがねえな、って言っているに違いない。
彼の困ったような、でも少し嬉しそうな笑顔から、出ない筈の彼の
声が聞こえてくるようだった。

ワンルームのフローリングに置かれた小さな折り畳み式丸テーブル。
あたしと準一はそれに向かい合って座って、さっきまで彼がフライ
パンで焼いていた焼肉を突付いていた。

食器が無い為、フライパンに乗ったまま食卓に現れた焼肉に、あた
しは思わず笑ってしまった。

当然、茶碗もないので、あたしのご飯は彼の大きめのマグカップに
盛られた。

日常的に利用しているコンビ二弁当のお陰で、割り箸だけは腐る程
蓄えられていた。

フライパンの上の焼肉は、単なる焼いた豚肉でそれ以上でも以下で
もなかった。

野菜が入っている訳でもないし、そもそも肉に味がしない。

塩も胡椒も振ってないようだ。

それでも、九死に一生を得た気になっていたあたしには御馳走だっ
た。

「おいしいよ！準一。料理まで上手なんだね。」

見えずいたお世辞を言ってやると、彼は片方の眉だけ上げて睨んで
見せた。

『そんなワケない 塩がなくて味をつけてない オレはおいしくな
い』

「あ、塩切らせてたんだ。そうだね、焼肉のたれでもあればね・・・明日、仕事帰りに買って置いてあげようか？あたしの食器も要るし・・・。」

それを聞いた準一は、今度は両方の眉を吊り上げて目を見開いた。

『今日だけじゃないのか？』

「・・・その、準一さえ良ければ、しばらく・・・ダメ？」

上目遣いでパチパチ瞬き攻撃しながら、あたしはお願いしてみる。このフェロモン攻撃は、彼の前では全く功を奏さなかった。

毅然とした顔で、彼はノートにペンを走らせ厳しい顔であたしに見せる。

『ダメじゃないけど 理由は教えてほしい あと オレからミュキはここにいて電話するよ お父さん心配するから それでもいい？』

「・・・声出なくてどうやって電話すんのよ？」

大事な事を思い出した準一は、ハッと顔を上げた後、困ったように髪をかき上げた。

あたしの突っ込みが決定打になって、この話はうやむやの内に終了した。

頭の固そうな準一だけど、少なくとも今夜は何も聞かずに泊めてくれそうだ。

明日の事は明日考えればいい。

「お互いに過去の事には触れずに付き合おう」

そういう約束で始まったあたし達だったけど、結果的に準一は付き合い始めて早々に過去の秘密をカミングアウトしてしまった。

だけど、あたしの過去は彼の告白を聞いた後に話せるような内容では到底なくて、皮肉にもあたしは聞いた事で更に追い詰められてしまった。

過去の事も今回の一件も絶対に準一に知られてはならない。

電話を諦めて再びご飯を食べ始めた準一を見ながら、あたしはホッと胸を撫で下ろした。

兎にも角にも、ワンルームマンションは狭かった。

実家から離れた事のないあたしは、こんな狭いマンション見たのは初めてだった。

味のない焼肉定食の夕飯を終えてから、あたしは一宿一飯の恩を少しでも返そうと、狭いキッチンで食器を洗い始めた。

あたしが立ってる狭い廊下を挟んだ反対側がユニットバスになっている為、準一がシャワーを浴びている生々しい水音がリアルにあたしの耳に入ってくる。

水道の蛇口を捻る音まで聞こえるもんだから、音だけで彼が何をし

ているのか、大体想像する事ができた。
少ない食器を洗い終った時、突然、ユニットバスのドアがバン！と開いて、あたしの後頭部にガン！と直撃した。

「……………！！！」

突然の激痛に頭を抑えて座り込むあたしに、お風呂上りの準一が慌てて駆け寄る。

彼が近付いたその時、シャンプーの香りがする温かい湯気がモヤッと顔にかかった。

濡れた髪をオールバックにかき上げた準一の顔は、お風呂上りで紅潮していて何だか色っぽい。

その口元が ダ・イ・ジヨウ・ブと問いかけるように動いて、あたしは引き攣りながらも何とか笑ってみせる。

「平気平気。ちょっとビックリしただけ。あ、ここ洗い終わったから、あたしもシャワー借りていい？」

あたしの頭に異常が無い事を確認して、ホツとしたように彼は笑うと、ド・ウ・ゾと言うように唇が動いた。

独身の男の子が自分のマンションで服を着て風呂から出てくる筈がない。
なのに、裸で出てくるかと思いきや、彼は既に上下のスウェットス

ーツを着込んでいた。

あたしがいたから、一応、気を遣っているんだろう。

真面目な準一は、女の子の前で裸体を晒すのは失礼だと思っているに違いない。

でなければ、あたしに襲われるのが嫌で警戒しているのか……。

考えたら、そちらの線の方が確立が高そうで、あたしは複雑な心境でユニットバスに入った。

入ったらいきなり洋式便器。

締め切ったユニットバスの中は蒸し暑い蒸気で湿度100%だ。

脱衣所もないので、あたしは脱いだ服を便器の蓋の上に載せて、小さなバスタブの中に入る。

それがなんと狭いことか。

慣れてないあたしがシャワーの蛇口を捻ると、便器の上のあたしの着替えにまで水飛沫が飛び散り、床は水浸しになった。

長い髪を洗うと今度はシャンプーの泡が飛び散り、出た時にはトイレにまで泡の被害が及んでいた。

こんな狭いお風呂に入ったのは初めてだった。

あたしより体の大きい準一が、どうやってここで毎日シャワーを浴びているのか。

疑問を感じつつ、あたしは何とか入浴を終えた。

「準一！タオル貸して！」

ドアから手だけ出して催促すると、その手にポンっとバスタオルが渡される。

湯気でモウモウとしている水浸しのバスルームで着替える気になれなくて、あたしはバスタオルを体に巻き付けてドアをバン！と外に開いた。

その途端にガン！と衝撃音がして、そこには後頭部を抱え込んだ準一が座り込んでいた。

「あ、ゴメン！大丈夫だった？」

あたしの声に顔を上げた準一の顔は、初め、痛みで引き攣っていたが、あたしの顔を見るなり目を開いて硬直した。

裸にバスタオルを巻きつけたあたしのセクシーショットを目の当り

にしたんだから無理もない。

「ごめん。刺激が強かった？すぐ着替えるから。」

準一もやっぱり男じゃん。

調子に乗ってウィンクまでしたあたしの前に、お馴染みのノートが突きつけられた。

『ミニキ まゆげ なくなってるよ』

メッセージを見るなり、あたしはノートを奪い取って彼の頭を思い切り引っ叩いた。

「準一、何時に起きるの？」

シングルベッドに先に入って、あたしは彼が目覚まし時計をセットしているのを眺めた。

彼は右手を広げた上に左手の人差し指を乗せて、ロ・クと言った。

「六時！？早くない？仕事何時から？」

その答えに、今度は左手の指を三本乗せて八・チ・と言った。

「うわ……。工場勤務って大変だね。あたしなんか9時からだよ。しかも職場近いし。あ、でも、鍵がないから朝は一緒に出るよ。帰りは……。どうしよ？」

ブツブツ言いながら考え込んでるあたしの目の前に、チェーンがつ

いた鍵がぶら下がっていた。

準一は少し照れたような笑みを浮かべて、鍵を指差してからあたしを指差す。

その唇がモ・テ・イ・テと動いた。

「え、あたしが持っていていいの？そりゃ、あたしの方が後から出勤して先に帰るけど……。それって、明日もここに帰って来ていいって事？」

ウンと、頷いた後で、準一の唇はゆっくりとオ・ヤ・ス・ミと動いた。

準一が部屋の明かりを消すと、途端に目の前は闇になった。もう彼の顔は見えない。

ノートの文字も当然見えない。

つまり、暗い場所では彼と意思疎通が全くできなくなってしまっただ。

当然の事実に気が付いて、あたしは突然心細くなった。

声が聞こえなくて顔も見えなかつたら、準一が何を考えているのかも分からない。

あたしの不安をよそに、ベッドに準一が入ってくる気配がした。

暗闇の中、彼の腕があたしの体に触れてドキッと心臓が高鳴る。

狭いシングルベッドであたしは壁にできる限り張り付いて場所を空けようと試みたが、見かけより体の大きい準一が入ると否応無くお互いの体が触れ合ってしまう。

文字通りの暗黙の了解のもと、あたし達はお互い背を向け合って反対側を向いて横になった。

触れる背中から彼の体の温かさが伝わってきて気持ちいい。

「準一？寝た？」

寝てないのは分かっていたけど、あたしは一応聞いてみる。

返事の代わりに、暗闇の中で彼がこちらに体を向けたのが分かった。あたしも彼の方に体を向けて、今度は向き合う姿勢で横になる。

布団の中をまさぐると、彼の左手を発見した。

冷たくて骨ばった大きな手。

あたしはその手を右手でギュッと握り締める。

「いい？あたしが言った事に対してイエスだったらギュって一握り、ノーだったらギュギュって二回握り返して？分かった？」

すぐさま彼の左手があたしの右手をギュッと握り返してきた。
我ながら名案だ。

これでベッドの中でも何とか会話ができる。

「じゃあねえ、明日夕飯作ってあげようと思うんだけど、カレーライス好き？」

ギュッと彼の手が一回だけ強く握り返された。
カレー好きなんだ。

「じゃあねえ、カレー粉はバーモントカレーでいい？」

ギュギュッと二回。

甘口は苦手なのか。

「じゃ、ジャワカレーでいいかな？辛口のヤツ。」

ギュと一回。

え、あれ、相当辛いのに。

さっきは味のない豚肉食べてたのに、本当は辛党なのか。

「・・・あたしが突然来て迷惑だった？」

ギュギュッと二回。

良かった。

少なくとも嫌がられてはないみたいだ。

「準一・・・あたしの事好き？」

少しの間が開いた後、あたしの右手は彼の両手で包み込まれるようにギュウっと握られた。

「・・・大好きって事？」

もう一度、ギュウっと力が入る。

ほっこり温かくなるような幸福感。

それが彼の手から乾いたあたしの心に注入されていく。

「おやすみ、準一。」

とても穏やかな気持ちになって、あたしは今までの人生で初めて満たされて眠りについた。

ピピピピ・・・

部屋のどこかで鳴ってる聞き覚えのあるケータイアラームの音。

その音で目が覚めたあたしは、一瞬自分がいる場所が分からず、ボーゼンとしたまま辺りを見回した。

ガランとした小さな白い部屋。

やっと準一のマンションに押し付けてきた事を思い出した。

家主である準一の姿はもうなかった。

あたしのケータイアラームが鳴るといふ事は8時なんだろう。

彼はとつくに職場にいて、仕事を始めた頃だ。

怒涛の週末は終わって今日は月曜日だ。

あたしも出勤しなければ。

ノブリンとの約束があった金曜の夜はたった3日前の事なのに、思
い出すのも面倒臭いくらいに遠い昔の話に思われた。

いつものOL制服を着て、まだ床が半乾きのユニットバスで化粧を
する。

長い間居候を続ける気はなかったけど、正直、他に行く当てなんか
なかった。

しばらくはここにいるだろうと判断して、自分の化粧ポーチと歯ブ
ラシを鏡の前の棚の上に置いた。

準一の歯ブラシの横に並べて立てたあたしの歯ブラシ。

新婚みたいで何だか気恥ずかしいのに嬉しくて、あたしは鏡に向か
ってキメポーズをとってみる。

昨夜のドキドキ効果で女性ホルモンが活性化されたのか、心なしか、
今日のあたしは少女のような顔をしていた。

まるで、まだ初恋を知ったばかりの中学生の時みたいだ。

つまらない日常が再び始まった。

今日は締め日が終わったところだったので比較的暇だったが、する事がないというのも、それはそれで疲れるものだ。

する事ないなら帰って欲しいくらいだが、社会人としてはそうもいかない。

「ねえ、金曜の夜は誰と会ってたのよ？」

隣のデスクの悪友が周りを気にしながらコソコソと聞いてくる。

・・・こいつにはいい男できたら紹介するって言ったんだっけ。

だけど、真面目で清纯派の準一の事を噂話のネタにされるのは、あたしには耐え難い事に思われた。

今まで付き合った男どももみたいなチャラ男と一緒にされたくない。

「誰とも会ってないって。いいことなんか何にもないもんねえ。」

パソコンを見つめたまま、あたしは無表情を装った。

いいことはある。

準一が帰ってくる場所にあたしも帰る。

それだけの事があたしの心をポカポカと暖めていた。

首にペンダントみたいに提げた鍵を、あたしはお守りみたいにそつと握りしめた。

殆んど何もせずに終わった職場を、いつもと同じように定時きっかりにあたしは飛び出した。

車を飛ばし、先日ノブリンと遭遇したスーパーでカレーの材料を買い込む。

実家に住んでるくせに食費も入れず、それどころか車の維持費さえ親に払わせていたお陰で、あたしはそこそ貯金があった。

スーパーを一回りしてカレーの材料を買い込むと、隣接する100円ショップに突入する。

陶器コーナーで自分用の茶碗やマグカップを一式買って、ついでに目についた小さな観葉植物もカゴに入れた。

あの水浸しのユニットバスに少しでも清涼感を与えようと思いついたからだ。

準一が帰ったら、あたしの作ったジャワカレーができて、掃除がしてあるバスルームには観葉植物。

びっくりした彼にあたしは満面の笑顔でこう言うのだ。

「お帰りなさい」って。

人生は本当にうまくいかない。

夜8時の準一のマンション。

実は生まれて初めてだったカレーライス作りに、あたしは躍起になっていた。

作り始めたのは夕方の6時だった筈だ。

なのに2時間経過した今でも、じゃがいもとにんじんの皮がようやく剥けたところだった。

そろそろ彼も戻って来るのに……。

カレーがこんなに難しいとは思っていなかった。

彼が帰った時にカレーが出来上がっているという未来予想図は早々に破られた。

掃除をするどころか、狭いキッチンの床にはジャガイモやニンジン

の皮が散乱し、昨日より汚くなっている。

何とか剥けたジャガイモとニンジンの破片を鍋に入れて加熱するが、電気コンロなので全然温まらない。

そこで入れ忘れていた玉葱の事を思い出し、皮を包丁で剥いてみると物凄い刺激臭に涙が出てきた。

思わず目を瞑った瞬間、滑った包丁が左手の指を掠めて、皮がスパッと削ぎ取られた。

「ぎゃああ！ち、血が出たあ！」

オタオタしている間にも指は血で染まって、持っていた玉葱までも赤く色付いていく。

タオルを探しに部屋に飛び込むと、今度は沸騰した鍋から熱湯が噴出し、コンロがジュウジュウと焦げた音を立てた。

鍋の蓋を取ろうと慌てて伸ばした手に熱湯がかかり、思わず反射的にその手をパッと離す。

手から離れた鍋の蓋は、重力のまま落下して、つま先を直撃。

その痛さにあたしは悲鳴を上げた。

「・・・いったああい！」

つま先を押さえて蹲ったあたしの目の前で、玄関のドアがガチャリと音を立てて開いた。

そこから見覚えのあるモスグリーンの作業着が現われるのが視界に入った。

カレーまだできてないのに・・・！

帰って来るのが早すぎる。

「・・・？」

準一はキッチンで蹲っているあたしを見下ろし、首を傾げて微笑んだ。

ジャガイモの皮で遊んでるとでも思ったんだろうか。

あたしはカレーさえもろくに作れない自分の不甲斐無さが情けなくて、涙が出てきた。

尤も玉葱の強烈な匂いのせいで、さつきから泣きつ放しだったんだけど。

蹲ってベソベソ泣き出したあたしの横に準一は黙って座った。

床に散乱したジャガイモとニンジンの皮、血まみれの玉葱、沸騰し切ってる鍋の中には熱湯とジャガイモの破片。

そして足を押さえて泣きながら床に蹲っているあたし。

何をしていたか、語るまでも無い。

一目瞭然というヤツだ。

「・・・ゴメン。カレーできなかった。帰ってくるまでに完成させようと思って頑張ったのに。お帰りって言ってあげようと思ったのに。汚しちゃってゴメン・・・。」

しゃくり上げながらあたしは横に座った準一の肩に顔を埋めた。

情けなかった。

あたしが今までどれだけ何にもせず生きてきたか、身を持って思い知らされた気がした。

どんなに粹がっても、あたしは所詮カレーも作れないただの子供で、今まで一人で生きてきた準一に敵う筈もない。

彼を手伝うどころか逆に仕事を増やして、迷惑かけてしまった。

と、その時、いきなり準一が流血しているあたしの手を取った。

ズボンのポケットからハンカチを出すと、手際よく傷口を拭いてギョッと押さえた。

手を握られたまま正面から向かいあう姿勢になって、あたしは何故か緊張して硬直する。

女の子っぽい準一の優しい眼差しが、あたしの胸に突き刺さるみたいだ。

その唇が、ア・リ・ガ・ト、とゆっくり動いたのを見て、あたしの目から涙がポロポロ零れ落ちる。

「……でも、ダメだったじゃん。カレーでできなかったじゃん。あたしって何にもできないんだよ？」

準一は笑って胸ポケットからペンと手帳を取り出して、いつものようにペンをクルリと回しながら書き始めた。

恥ずかしそうに見せたそのメッセージを見て、あたしは更に号泣した。

『帰ったらミユキがいた　それだけでうれしい　ありがとう』

あたしが作りかけたカレー（厳密に言えばジャガイモの欠片が入った熱湯）は、その後、準一の手によって本物のカレーに生まれ変わった。

準一は慣れた手つきで包丁を操り、手早く玉葱を刻んでいく。

TVドラマのお母さんが料理するみたいに、トトトト・・・とりズミカルな音を立てて、玉葱は透けて見えるくらいに薄く切られていった。

あたしはその様子を、背伸びしながら準一の背中に張り付いて凝視していた。

女として完敗だ。

キャリアの違いを見せつけられた気がした。

その後、僅か20分でカレーは完成した。

あたしが2時間前からジャガイモと格闘してキッチンを汚すよりは、彼が帰ってきてから一人で作った方がよっぽど効率が良かったという事実には愕然とする。

準一はジャガイモの皮が散らばったままの床を気にすることなく、

ニコニコと機嫌よく笑っていた。

あたしがいた事がそんなに嬉しかったのか。

ちらりと見上げた彼の顔がとても穏やかで、それを見てあたしも少し安心する。

時刻は既に9時になるうとしていた。

ようやくできたカレーの鍋と、さっきの100円シヨップで二人分買ってきた白いお皿とスプーンを丸テーブルに並べる。

そこで、あたし達は重大な事実気付いて顔を見合わせた。

「準一、ご飯は？」

『今日は炊いてない やつてくれたんじゃないの？』

ペンをクルクル回しながらノートを広げて、準一は苦笑した。

文章にはしなかったものの、『そんなことだと思った』と顔が言っている。

カレーにご飯がない！？

何のコントだ、これ・・・。

完全に力が抜けたあたしは、ヘナヘナとフローリングに倒れ込んだ。

あたしの人生初のカレーはライスが無い為、食パンをつけて食べるという斬新なスタイルとなった。

オ・イ・シ・イ、と準一は何度も言ってくれたけど、全然嬉しくない。

殆んど彼が作ったカレーなんだから、おいしくて当たり前だ。

あたしは不貞腐れて、食パンを黙々と食べ続けた。

何も実りのある仕事はしてなくせに、勝手に疲労困憊したあたしは早々にシャワーを浴びてベッドに横になった。

・・・これが毎日続くんだ。

一人で生きてくってどんだけ大変なんだろう。

準一はこんな生活を一人でずっと続けてきたに違いない。

もはや尊敬の眼差しで、あたしは食器を洗っている彼の背中を眺めた。

でも。

大変だけど、楽しい。
こんな風に毎日準一と一緒にいられたら……。
生きてくのは大変だけど、きつと大丈夫。
きつと何とかやっていける。
そんな気がした。

うつらうつらとしかけた時、肩をチョンチョンと突付かれた。
薄目を開けると、目の前にスウェットスーツに着替えたお風呂上りの準一がノートを広げている。

『ミユキ どうようび ひま?』

「え?今週の土曜日?仕事は休みだけど、どうして?」

『駅前いこう もうすぐクリスマスだし』

「あー……。来週はもう12月かあ。そーだね、またデートしようか。準一はまた仕事?」

残念そうにコクンと頷いてから、彼は再びノートに書き綴る。

『また夜マクドナルドで待ち合わせそう 残業ないから6時くらい』

OK?』

「いーよ。じゃ、それまであたしをここに置いてくれるって事ね?」
意地悪く聞いてやると、準一は八つとした顔になって、慌てて首をブンブン振った。

『いいけど 連絡くらいはするべき お父さん心配してる オレは話せないけど でもオレのところにいて言うてくれてもかまわな』

「いいの?そんな事言つて。ウチのお父さんに娘をキズモノにし

やがってって怒鳴られるかもよ？」

家族公認のアバズレ娘に、父親がそんな事を言う筈もないが、あたしは彼の反応が見たくて少し嚇してやった。怖気づくかと思いきや、意外にも彼は堂々として頷く。

「大事なむすめさんを男の家にとめた責任はとる 必要なら土下座するし なぐられてもかまわない このまま黙ってかくれているのは よくない だから 連絡はするべき」

・・・サムライか。

切腹しそうな勢いの開き直りっぷりは可笑しかったが、同時に頼もしく思えた。

真っ直ぐな準一は、きつとどんな状況にあっても逃げ隠れしないだろう。

逃げて隠れてる為に、一時の享楽に溺れていたあたしとは違う。

逆境にいてさえ清く正しい準一に比べて、ぬるま湯の中でダラダラ生きてきたあたしは何て汚れてるんだろう。

揺るがない彼の視線が眩しくて、あたしは無意識に目を逸らせた。

「分かった。その内、あたしから連絡しとくよ。でも、今週末まではここにいていい？土曜日デートしよ？」

『OK』

準一は嬉しそうに微笑んだ。

ここでずっと彼と一緒に生きていきたい。

小さなこのマンションで、二人で肩を寄せ合って暮らしたい。

でも、いつかは、あたしがここに転がり込んで来た理由を話さなければならぬだろう。

その時、準一はあたしを受け入れてくれるんだろうか。

安らぎと幸福感の中、あたしは漠然とした不安を感じていた。

安らぎ 2

このマンションに来てから気が付いた事。

それは静けさだ。

声を発しない準一と一緒にいると、当然の事ながら、話しているのはあたしだけになる。

それはつまり、あたしが喋っていない間は静寂の時間が流れるという事だった。

ガランとしたこの狭い部屋には家具がなかった。

唯一置いてあるのは、備え付けのクローゼットのみで、テレビもラジオもない。

おまけに、電話で話せないからという理由で準一はケータイさえ持っていないかった。

この平成の現代において、これだけ電化製品の少ない家は初めて見た。

だけど、音はどこにでもある。

声やテレビの雑音がなくても、黙っていれば窓の外から川の水音が聞こえるし、車のエンジンの音が遠くで響いているのが分かる。

準一と一緒にいる時のこの静かな安らぎに、あたしは心地良さを感じていた。

今まで沈黙が苦手で、くだらないバカ話で無理矢理盛り上がった事が嘘みたいだ。

ボンヤリと川の音に耳を傾けていると、ベッドに準一が入ってきた。部屋の明かりを消そうと弄っているリモコンを、あたしは手を伸ばしてパッと奪い取る。

「ね、準一。まだ早いし眠くないから、お話しよ？」

まだ眠りたくなかった。

彼の顔をもっと見ていたくて咄嗟に出た嘘だった。

返事の代わりに、準一は笑みを見せてコクンと頷く。

・・・彼も同じ気持ちだったのかな？

都合のいい想像をして、あたしは嬉しくなった。

あたし達は狭いベッドにお互い向かい合って横になった。

至近距離に彼の顔が来て、あたしの心臓は勝手にドキドキと音を立てる。

彼も緊張しているのか、黙ったまま視線を泳がせていた。

間近にきた彼の顔をじっくりと観察する。

細いけど、しっかりした首筋から肩にかけてのライン。

細面の顔の骨格に、整った顔立ち。

睫毛の長い黒目がちの目は少し下がっていて、これが女の子っぽい印象を強めている原因になっている。

あたしは手を伸ばして、その頬にそつと触れてみた。

準一は触れた瞬間、ビクつと体を硬直させた。

でもそれは一瞬の事で、やがて犬のように目を伏せて、あたしのされるがままになってくれた。

どこまで許されるのか分からないまま、あたしは少しづつ手を移動させて、彼の形のいい唇に触れた。

閉じた唇の奥で、彼の喉が鳴る。

あたしと同じくらい準一も緊張しているのが分かって、あたしはまた嬉しくなった。

「・・・ね、準一も触って？」

思い切って言ったあたしの言葉に、彼は緊張した面持ちでコクンと頷いた。

不器用そうな大きな手が差し出され、そっとあたしの頬に触れる。彼の手の感触をもっと感じたくて、あたしは思わず目を瞑った。

骨ばった大きな手が頬を滑り、睫毛に触れ、髪を撫でる。

そっと目を開けると、優しい目であたしを見ている彼の顔があった。

今なら。

今ならもしかすると大丈夫かも。

突如、そう思ったあたしは思い切って前から言えなかったお願いを口にした。

「・・・キス、して？」

準一は前みたいに、ゴメンとは言わなかった。

その代わり、さっきまでの優しい笑みがスッと消えて、真面目な顔に戻った。

再び喉の奥が鳴って、緊張で触れている手が強張る。

あたしはその手を掴まえて、ギュッと握った。

それに勇気付けられたのか、彼は意を決した面持ちで顔を上げて、ベッドから体を起こす。

ゆっくりと彼の顔が近付いてきて、あたしは慌てて目を瞑った。

キスは目を瞑らないとできないと思い込んでいた子供の頃みたいに。

目を閉じて待ち構えていたあたしの唇に、彼の唇の先がちょっとだ

け触れた。

少し間が開いてから、再び、唇がチョンと触れる。

鳥の啄みのような小さなキスをもう一度してから、彼はあかしから離れた。

そつと目を開けると、元の位置に戻って硬直している彼の顔があった。

きつと、今の彼にできる精一杯をしてくれたんだ。

期待したものと違っただけど、あかしは初めての彼からのキスに胸が熱くなった。

「じゃ、今度はあしがしていい？」

あたしが言つと、彼は可哀相なくらい緊張で固くなった。

これ以上は無理！つて顔が言っている。

それが何だかわいくて、あかしは笑いながら強引に接近して、彼のおでこにチュっときスした。

あかし達はその後、狭いベッドに寝そべって昨日のイエスノークイズの続きをした。

手を握って返事をするのは確かに名案だったが、イエスかノーかの選択しかできないのでこちらも聞き方を考えなければならぬ。

それでもノートなしで意思疎通ができるのは嬉しかった。

「明日もカレーでいい？ご飯炊いておくからさ。」

準一は苦笑しながら、ギョっとな回握った。

「じゃあねえ、昨日も聞いたけど、あたしの事好き？」

ずうずうしくも同じ質問をしてみると、彼も昨日と同じように両手でギユウっと握り締めてくれる。

あたしは安心して、布団に潜り込んだ。

「・・・ありがとう。これで安眠できるよ。おやすみ。」

準一は優しい顔であたしを見下ろして、そして部屋の明かりを消した。

闇に包まれた部屋で、あたしは川のせせらぎと彼の穏やかな呼吸を聞きながら眠りについた。

穏やかな日々は瞬く間に過ぎていった。

初日だけはカレーライスを作ってみたが、人生は甘くない事が分かったので、翌日、残りのカレーを終わらせてからは、ホカ弁を二人分買って待っていることにした。

彼がマンションに戻るのは大体8時くらいだ。

定時が5時で2時間残業した後、帰ってくるのに1時間かかるらしい。

毎朝、原付をマクドナルドに停めて、そこで送迎バスに乗って隣の市の自動車部品工場まで通っていると彼は言った。

いつも彼がマクドナルドにいた理由がやっと分かった。

あたし達は丸テーブルで向かい合って弁当を食べてから、ベッドに寝そべって指を絡ませて遊んだ。

音のない部屋で、あたし達は指の感触で会話しながら、穏やかな時間を楽しむ。

プラトニツクな関係だったが、逆にそれはとてつもなくエロティックで、そして肌を合わせるよりずっと心が満たされた。

土曜の夜にデートの約束をしたお陰で、何とかそこまでは置いてもらえる事になったが、父親に連絡する気は毛頭なかった。

遊びまくってたアバズレ娘が、どのツラ提げて男の家に居候してますけど安心して下さい、なんて言えるだろう。

前から気になっていたが、準一は今でもあたしの事を穢れの無い箱入り娘だと信じている。

よそ様の大事な娘様を、親に断わりもなく困っているのが心配で仕

方ないんだらう。

だからと言って、彼の固定観念を訂正する勇気もなかった。この前の団地に行った時のカミングアウトで、準一が男たらしだった母親に嫌悪感を抱いているのが分かったからだ。

『どうしてお父さんとケンカしたの？』

無邪気に聞いてくる彼に、あたしは返す言葉もなくて、適当に誤魔化すしかなかった。

もちろん、隠し事をしているみたいでいい気分ではない。

それが、少しづつあたしの心にプレッシャーを与え始めていた。

『7時にマクドナルドで待ってる 準一』

土曜の朝（既に10時だったので朝とは言わないが）、目が覚めると彼はもういなかった。

テーブルの上に置いてあったノートにそう書かれたメッセージを見て、今日が土曜日だった事を思い出す。

完全週休二日制の仕事のあたしは、準一がいない夜までの間、何をしたらいいのか分からない。

何しろ、ここにはテレビもビデオもパソコンもないのだ。

こんな時こそ掃除や洗濯をしてあげるべきなんだろうけど、家事全般に於いて彼が一人でした方が効率がいいことが判明したので、あたしはすっかりやる気を失くしていた。

カーテンを開けると、冬らしい清々しい寒空にすっかり昇り切った日の光が眩しい。

今夜は駅前のイルミネーションも、先週よりもっと増えてるだらう。

彼と二人で歩くクリスマス前の街並みを想像して、あたしは子供みたいにワクワクした。

その日、結局何にもする事が何もなかったあたしは、念入りに化粧してから早めにマンションを出た。

待ち合わせの7時にはまだ時間があつたが、彼を待ちながら一人で街を散策するのも悪くない。

音のないマンションで一人でボーっとしているより、よほど有意義だ。

いつも通りコインパーキングに車を停めてから、あたしは駅の方に向かつて歩き出した。

12月になつて何となくお祭りムードの街を眺めるのは楽しい。

こんなしけた街にもサンタが来そうだ。

年末の忙しさと、今年の事はどうでも良くなつちやう惰性的な雰囲気があたしは好きだった。

ゆっくり歩きながら、先週、準一と『付き合います宣言』をした噴水まで辿り着いた。

カップル達が並んで座るベンチの前を通つて、噴水の縁にチョココンと腰掛ける。

もうそろそろ7時になつてる筈だ。

今日は外食になるだろうと、ケータイでグルメ情報を検索し始めた時。

目の前に立ちはだかった人影に気が付いて、あたしは顔を上げた。

「林美由紀サンでしょ？俺の事、覚えてる？」

つぶれたような高い耳障りな男の声。

そこにはフードのついたベストに細身のジーパンを履いた、見るからにチャライ茶髪男があたしを見下ろしてヘラヘラしていた。服装と声の感じから、あたしと同年代くらいに見えた。

細い釣りあがった目と薄い唇から見える歯並びの悪さがチャライ上にチープで、印象は醜悪そのものだ。

ニキビの痕が残る汚い肌は日焼けしていて、冬にはそぐわないみすぼらしさを醸し出している。

その顔には見覚えがあるような気もする。

でも明確な事は何も思い出せなくて、あたしは顔をしかめた。

「・・・そうですけど？どうしてあたしの事・・・？」

「知ってるよ。あんたこの界限じゃ結構有名なんだよ。片田舎の駅前でウリやってるってね。俺のダチが声掛けたの覚えてない？俺もその時、傍にいたんだけど、気付かなかったかな？」

有名と言われて、あたしの頭にカツと血が昇った。

こんな所でナンパされてホテルに付いて行ったら噂くらいは立つかもしれないが、あたしは別にウリやってるつもりはない。

そもそも、この目の前の男が誰なのか思い出せなくて、あたしはぶっきらぼうに言い返した。

「・・・誰よ、ダチって。あんたなんか見覚えないけど。」

「太田ってヤツ。オタクっぽくて、あんたが5万円巻き上げたヤツって言ったら覚えてるだろ？名前も聞かなかったかもしれないけど。」

その言葉に、あたしの顔からサーッと血が引いた。

あのオタク男！

父親のケータイに送られた写メに写ってたアイツだ。

その場にいたという事は、こいつがああ写真を隠れて撮ってたんだ。

・・・!

今まではまらなかったパズルのピースが、あたしの頭の中で音を立
てて組み立てられていく。

でも、どうしてこの男が父親のケータイを知ってたんだらう・・・。

あたしの考えてる事を見透かすように、男はニヤニヤしながら勝ち
誇った顔をした。

「どーしてか教えて欲しかったら、俺に付き合ってよ。情報料差っ
引いて1万くらいでどう？」

「ふざけないでよ。あたし別に商売やってる訳じゃないし。」

「じゃ、なんであの時は金巻き上げたんだよ？金払えば誰とでもヤ
るんだろ？」

「あんたにカンケーないし。ってか、マジキモいよ。あんたなんか
とやるわけないじゃん。顔見て出直したら？」

暴言を吐いて立ち上がったあたしの腕を男は無遠慮に掴んで、自分
に引き寄せる。

並びの悪い歯を剥き出して、怒りに歪んだ顔をあたしに近付けた。

「おい、調子こいてんじゃねえぞ！？またオヤジにメール送って欲
しいのかよ？」

「何それ？脅迫してるつもり？メールでも何でも勝手にすれば？誰
があんたなんかと・・・！」

思わず出た平手打ちが男の頬を掠めて、火に油を注いでしまった。
キレた男の拳があたしの顔に向かって振り上げられる。

思わず目を瞑って肩を竦めたその時。

突然、あたし達の間を割って入った体に、男は突き飛ばされて尻餅

をついた。

恐る恐る薄目を開けたあたしの目の前には、モスグリーンの作業着を着たひよる長い背中が立ちはだかっていた。

・・・こんなの、アリ？

盾になるかのように、あたしの前に立ちはだかるモスグリーンの作業着。

突如現われたその背中は、間違いなく準一だった。

黙っているけど、殺気立った気配が彼の背中から伝わってくる。

あたしの脳裏に、中学校で初めて彼と出遭ったあの日の事が浮かんだ。

あの時も準一はあたしを助けてくれたんだっけ。

細いけど頼もしい背中の後ろに匿われて、あたしは感動で目頭が熱くなる。

中学校の事が脳裏に浮かんだその瞬間、あたしはハッと思い出した。準一に体当たりされて地面に座り込んでいるこの男の正体・・・！

「てめえ・・・。ボンビー本田か・・・？」

あたしが口を開く前に、そいつが準一のだ名を口にした。

突然、聞き覚えのあるだ名を呼ばれて、動揺した準一の背中がビクッと揺れる。

あたしは準一の後ろから顔だけ出して、もう一度その男の顔を確認した。

間違いない。

名前までは覚えてないけど、こいつ、東郷中で同じ学年にいたヤツだ。

クラスは一緒になった事がなかったなので印象は薄いけど、確かに顔

に見覚えがある。

あの時はこんなチャラい雰囲気じゃなくて、寧ろ、あのオタク男と同じような地味な少年だった筈だ。

高校デビューしたのか、まるっきり別人の今の風貌とあの頃の面影はリンクしなかった。

一方、名前を呼ばれた準一は、どうしても思い出せないように首を傾げたまま、彼の顔を凝視していた。
無理もない。

あの頃、『ボンビー本田』は色んな意味で有名人だったが、当の本人は在学期間僅か4ヶ月でそのまま来なくなってしまったのだから、皆は準一を知っていたが、彼が知ってる同級生は殆んどいないだろう。

醜悪な顔を歪ませて、そいつはお尻についた埃をパンパンと払いながら、ゆっくり立ち上がった。

上目遣いに準一の顔を睨みつけてから、再びニヤニヤと厭らしい笑みを浮かべた。

「何だよ、やっぱりボンビー本田じゃん。林とヨリ戻ってたのか。腐れ縁というか、ウリやってたモン同士、お似合いじゃん？この女が何やってたか知ってて、今でも付き合ってるのかよ？それともお前も客か？」

男の言葉に、準一の顔が強張ってカツと紅潮したのが分かった。

あたしは耳を塞ぎたかった。

準一が学校に来なくなつたあの当時、彼のそれまでの境遇についての噂は流れていた。

性的虐待を受けていたのではないかという憶測は、耳年増の女子生徒達には実しやかに語られていたのだ。

まだ子供だったあたし達は、本来の意味は分からずとも、準一がされてきた事は何となく想像していた。

先週、彼が団地でカミングアウトしてくれた時、あたしが驚かなかったのは、あたしもその当時の噂を聞いていたからだ。

自分の噂が流れていたのを知らなかったのは、当人である準一だけだった。

準一が黙っていたので、男は更に調子に乗って唾を飛ばしながらペラペラ喋り続ける。

「林って金払えば誰とでもやるんだ。お前がオッサンの相手してた時、いくらだったか知らねえけど、こいつは一晩5万だぜ？この前俺のツレが払ったけど、お前もそのくらい払ってんのかよ？」

準一はあたしの顔を見下ろして、信じられないという顔をした。彼の顔から『嘘だろ？』というSOS信号が送られてくる。

でも、現場を押さえられてるこの男に、どんな嘘についても揚足を取られるだけだ。

あたしは何と言ったら分からなくて、黙って唇を噛み締めた。

準一が喋れない事を知らないこの男は、彼の沈黙を故意のものと勘違いした。

細い目を吊り上げて近寄ると、準一の作業着の胸倉をグイッと掴んで、自分の顔に近づける。

噛み付きそうなその顔は狂犬のようだった。

「オラ、悔しかったら何とか言えよ！それとも、ホントの事言われて言葉もないか？ボンビー本田のくせして女と付き合ってるなんて生意気なんだよ。金は払ってやるから一晩貸しな。何なら、お前の相手も紹介してやるよ。」

準一は胸倉を掴まれたまま狂犬の顔を見ていた。その顔には表情が無くて、怒りの色さえ見えない。苛められてる小さな少年のような彼を見ていられなくなったあたしは、思わず後ろから飛び出して、男に掴みかかった。

「るっせえんだよ！あたしの事はいいけど、準一は関係ないでしょ？テキトーな事言いやがって、そっちこそ調子こいてんじゃねえよ！」

「あんだと！？俺とやる気か・・・あ！？」

狂犬があたしを捕らえる寸前に、あたしは渾身の力でそいつの胸元に飛び込み、ドーンと体当たりした。

その勢いで、あたしは男にしがみ付いたまま噴水までなだれ込み、揉み合つたままの姿勢で水中に転げ落ちる。

ドボン・・・という水飛沫の音が響き渡り、あたしの体に冷たい水の感触が服越しに伝わってきた。

それに怯む事なくあたしは男にしがみ付き、その醜悪な顔を水の中に沈めてやった。

でも、優勢だったのはその一瞬だけだった。

男は物凄い力で水中から起き上がると、あたしの首根っこを掴んで、そのまま水中に力任せに顔から突っ込んだ。

鼻から水が入ってきて、あたしは水の中でむせて咳き込む。

その口の中にも大量の水が侵入してきて、溺れながら水中でジタバタと抵抗する。

あたしの脳裏に「死」という文字が浮かんだその時。

水中にもう一人分の足が乱入してきたのが見えて、あたしの体は強い力で引っ張り上げられた。

何とか水の外に顔が出て、あたしはゲホゲホと咳き込んで水を吐き出した。

腿まで噴水の水に浸かって、準一はあたしを片手で引っ張り上げながら、男に蹴りを食らわす。

もう一度、男が噴水の中にひっくり返った瞬間に、準一はあたしをすごい力で引き摺りながら外に出た。

まだゲホゲホ水を吐いてるあたしに逃走進路を指差すと、準一はあたしの腕を引っ張って走り出した。

全身ずぶ濡れで水飛沫を撒き散らしながら、あたし達は人ごみを駆け抜けた。

道行く人の群れが、すごい勢いで走って行く異様な二人を遠巻きに見つめている。

恥ずかしかつたけど、これだけ人目のあるところに出ればもう大丈夫だ。

いくら狂犬でも、ここまで追いかけて噛み付く事はできないだろう。

「準一、原付は明日取りに来ればいいよ。あたしの車で帰ろう。」

マクドナルドの方向に向かって走る準一を制して、あたしはそう言った。

大量に冷水を含んだ服は、急速にあたしの体温を奪っていく。

裾から滴る水はあたし達の走った跡を点々と残していた。

残念だけど、今夜はもうデートどころじゃなさそうだ。

準一は無表情のまま、あたしを見てからコクンと頷いた。

その顔に、いつもの優しい笑みはなかった。

少し棘のあるその表情に、あたしはさつき男に言われた事を思い出して憂鬱になる。

彼が聞いたなら、話すしかないか……。

諦めに似た脱力感があたしに襲い掛かってきた。

コインパーキングに停めてあったあたしの軽自動車でマンションに戻った時、時計は八時を回っていた。

クシャミをしながら濡れた服を全部脱いで、洗濯機の中にポンポン放り込む。

歯がガタガタ鳴るほどに体は冷え切っていて、あたしは全裸のままですニットバスに飛び込んだ。

温かい湯を浴びて、あたしはやっと人心地つく事ができた。

咄嗟の事とは言え、自分の浅はかな行動に自己嫌悪になる。

準一がいてくれたから何とか逃げて来れたものの、あたし一人だったら殺されそうな勢이었다。

狂犬みたいな同級生の顔を思い出して、あたしは身震いした。

曖昧な記憶だが、彼は確か三年生の時、隣のクラスだった。

5万円巻き上げて一回だけ寝たオタクは、どうしても思い出せなかった。

あたしが覚えてないだけで、オタクも同じ中学だったのかも知れない。

そう考えれば、アイツが父親のケータイに写メ送る事はそう不思議じゃない。

あたしの父親が地元じゃ有名な大手自動車部品メーカーの重役だった事は、小学校の時から知られていた。

もちろん、自分から友人に言った事は一度もない。

なのに、入学した時には「ホラ、あの会社の重役の娘さん」みたいな呼ばれ方をされた。

あたしがイジメの対象になり易かったのは、持ち前の生意気な性格プラス「金持ちの娘」に対する周囲のやっかみも少なからずあったのだ。

準一もそれを知っているから、あたしの事をいいトコの箱入り娘だ
って思い込んでるんだろ。う。
当のあたしが知らないだけで、準一もあたしに関する噂を聞き及ん
でいるに違いない。

父親の名前から、会社の所属部署まで当時の同級生は知ってるんだ
から、父親のケータイを調べるのは可能だ。

何しろ重役なので公式役員名簿みたいなのは冊子になって発行され
ている。

探偵でも使えば、案外手に入るのかもしれない。

あの狂犬に再会してまで、今更、知ろうとは思わないけど。

この年になってまで、こんなにあの頃のシガラミに苦しめられると
は思わなかった。

何と言っても、田舎の小さな街は人の出入りが少ない。

小学校の同級生が中学、高校とやっと離れてから、同じ会社でバツ
タリなんてよくある話だ。

あたしは表現し難い閉塞感と焦燥感を感じた。

この街を出たい……。

あたし達の事を誰も知らない場所で、準一と二人で生きていけたら
……。

そんな考えが漠然と頭に浮かんだ。

あたし達の過去を払拭するには、それしか方法はないように思われ
た。

「お先。準一も入る？濡れてない？」

ユニットバスのドアをバン！と開いて、あたしは白々しいほど元気にそう言った。
準一はいつものスウェットスーツに着替えて、ベッドにもたれて座り込んでいる。
あたしの声にチラリとこっちを見たが、首を横に振って視線を逸らせてしまった。

・・・怒ってる。

理由は分かっている。
箱入り娘だと信じてたあたしが、お金巻き上げて男と遊んでたんだってバラされたんだから。
トラウマになるほど嫌だった彼の母親と同じ事をあたしはしていた。
もう嫌われて当然だ。
言い訳もしようがなくて、あたしは溜息をついてバスルームからノロノロ出てきた。

ベッドの縁にもたれて座っている彼の隣に、あたしは少し間を開けて座る。
体に触れるのさえ嫌だって言われたら、ショックで泣いてしまうかもしれないからだ。

「準一・・・怒ってるよね？あたしの事キライになったでしょ？付き合っの嫌になったなら、正直に言ってもいいよ。」
「・・・。」

彼は黙ったまま、ぼんやりと正面を見つめている。
あたしも同じ方向を見つめながら、構わず話し続けた。

「ここに居るの、今日までって約束だったもんね。寂しいけど準一が嫌になったんなら、あたし出て行くよ。そしたら、もう会わないし。」

「。。。。。」

「嘘つくの嫌だから正直に言うね。あたし準一と出会っただけで、結構遊んでたんだ。お金に困ってた訳じゃなくて。。。何ていうか、現実逃避みたい。毎日退屈で、辛くて、出口が見えなくて寂しかった。病的にセックスにハマっちゃうんだ。準一じゃないけど、あたしもぶっ壊れてたんだよ。」

「。。。。。」

セックスと言う言葉があたしの口から出た時、無表情に聞いていた彼の横顔がチラッとこっちを見た。

ここまで開き直って告白してしまうと、もう後は楽だった。嫌われて、追い出されても仕方ない。

そう覚悟を決めたあたしは寧ろ気が楽になって話を続けた。

「準一に会ってから、デートして。。。ここで一緒に暮らした一週間すごく楽しかった。このままずっと一緒にいたかったけど、準一があたしを受け入れられなかったら仕方ないよね。でもあたしは、準一の事好きだから。ずっと忘れないから。。。今まで、ありがとう。」

気が付いたら頬を涙が伝っていた。

うわ。。。!

あたし、泣いてる!?

涙で同情買っ気はなかったが、これで準一と別れる事になると思うと胸が締め付けられた。

慌ててジャージの袖でゴシゴシ顔を擦ったその時、彼の腕があたし

の肩をグイッと引き寄せた。

一瞬、何が起こっているのか分からなかった。

あたしの体はフワッと抱き上げられ、気が付いたらベッドの上に押し倒されていた。

「・・・準一？」

呆然とするあたしを見下ろして、準一はあたしの上に馬乗りになっている。

そして、黙ったままスウェットスーツの上着を頭からガバッと脱いで捨てた。

剥き出しになった彼の上半身を見て、あたしは思わず息を呑む。

その細い体には、一面、赤く引き攣れた火傷の痕が広がっていた。

パニック 1

白い細い体に、赤い絵の具を撒き散らしたように広がる火傷の痕。胸から腹部にかけて、熱湯を浴びたかの様に炎症を起こした皮膚が一面引き攣っている。

腕には赤い斑点が散らばっていて、それがタバコを押し付けられた痕だという事はすぐに分かった。

肘から手首にかけては、カッターで切りつけたような細かい傷痕が無数に引かれている。

リストカットが、切る場所がなくなっただけに留まらず、かなり上までいつてしまった感じた。

首から上が白くて綺麗な肌であるだけに、対照的な傷だらけの体が更に痛々しく見える。

驚きで言葉もなく、あたしを見下ろす彼の無表情な顔と裸になった上半身を見比べていた。

あたしを見下ろしたまま、準一は何かを言っているように唇を動かしたが、聞き取れなかった。

「え、何！？分かんないよ……。ノートは？」

いつもの大学ノートを探そうと彼の下から這い出ようとしたが、準一に両腕を掴まれて、またベッドに押し付けられる。

無意識に抵抗していたあたしに、彼は覆い被さり信じられない行動に出た。

あたしが着ていたジャージのファスナーを引つ張り下げて全開にしてから、Tシャツを捲り上げてノーブラだった胸を鷲掴みにする。

「・・・！？や、痛っ・・・！」

いきなり爪を立てられて、あたしは思わず悲鳴を上げた。

その口を彼の大きな手が塞いだ。

準一は終始無表情で、口を塞がれてモガモガと抵抗しているあたしを見下ろしている。

彼が何を考えてるのか分からなくなって、あたしは急に恐怖を覚えた。

暴れている内に、彼のもう一方の手があたしのジャージのズボンに伸びて、下着さら引き摺り降ろされた。

下半身が急に外気に触れて、デリケートな部分が無防備に曝け出されたのを肌で感じる。

準一は曝け出されたあたしの両足を割って、自分の腰を押し付けた。

「・・・！！！」

こんなシチュエーションには慣れてる筈のあたしだったのに・・・。

抵抗しても全く敵わない準一の力に、あたしは怯えた。

彼の事は好きだったし、あたしも望んでた事だった。

でも、こんなやり方で、なし崩しに抱かれるのは絶対に嫌だった。

何とか脱出しようとする無我夢中で暴れるあたしの首に彼の手がかかる。その手がグッとあたしの首を押さえつけて、一瞬、息ができなくて意識が飛んだ。

その時、あたしは彼が云わんとしている事がやっと分かった。

準一は再現しようとしてるんだ。

自分がされてきた事、自分が抱えている闇をあたしに伝える為に。

コ・レ・デ・モ・オ・レ・ガ・ス・キ？

さっき彼の唇はこう言っていたのだ。

動けないように首を押さえつけて、彼は強引に足を持ち上げる。

彼の気が済むなら・・・。

これで彼のトラウマを共有してあげられるなら、あたしはどんな事でも受け入れる。

そう覚悟を決めて、あたしは目を瞑った。

目を閉じて彼の侵入を待ち構えていたのに、突然、彼は動きを止めた。

首を押さえつけていた彼の手から力が急に抜けて、自由を得たあたしは急いで体を起こした。

立った今あたしに襲い掛かっていた準一は、自分の胸を押さええて真っ青な顔で荒い息をしている。

体はガタガタと震えて、苦しげに眉を寄せて声にならない呻き声が喉から聞こえる。

尋常でないその様子に、あたしはビククリして準一にしがみ付いて背中をさすった。

触った途端、凹凸のある皮膚の感触が手に伝わる。

胸部と同様、背中也焼け爛れた痕が一面に広がってるのに気が付いた。

でも、そんな事構ってられずに、あたしは必死で彼の背中をさすり続ける。

「どうしたの？ 苦しいの？」

体を強張らせて、あたしを押し退けると、準一は苦しそうにベッドから這い出した。

あたしに背を向けて床に蹲り、大きく深呼吸している。

ハーツ、ハーツという肺の奥から出てくるような大きな呼吸の音に、いても立ってもいらねず、あたしもベッドから這い出した。

「どうしたの？大丈夫？」

目をギュッと瞑って胸を押さえながら、準一はひたすら荒い呼吸を続けていた。

尋常ではないその動作に、あたしはどうしたらいいのか分からず、バカみたいに見つめる。

3分ほどそうしていただろうか。

それはとても長い時間を感じられた。

荒かった呼吸がやっと収まり出し、準一は最後にハーツと大きく息を吐いて座り込んだ。

蒼白になった彼の顔があたしをチラリと見上げて、ガクンと頂垂れる。

「ねえ、どうしたの？もう大丈夫？お水飲む？」

矢継ぎ早に問いかけるあたしを制して、準一はフラフラ立ち上がり、ノートとペンを持って丸テーブルの前に座った。

ペンをギュッと握り締めて、すごい速さでノートに書き殴っていく。あたしは目を見開いて、それを見つめた。

『これ パニック障害 ぶっ壊れてるって言ったのはそういうこと セックスすると あの時のこと思い出して 息ができなくなる 発作がひどいと死ぬかもしれない これでもオレのこと 好き？』

パニック 2

準一はペンを手が白くなるほど強く握り締め、ノートに濃い字で書き殴っていく。

まるで、自分の心に抱えている怒りや悲しみをぶつけるかのように、鬼気迫るその様子をあたしは体を硬くしてじっと見守っていた。

『近寄るな!』というメッセージが、彼の体全体から発せられているのを感じた。

まだ苦しいのか、肩で大きく息をしながら準一は上目遣いであたしを見上げた。

『あいつの言ったことは本当だ オレは母から強要されて 大人の相手をしてた オッサンだったりオバサンだったり 誰とでもさせられた その最中に なぐられたり 首しめられたり 熱湯かけられたり 何度も死ぬかと思っただ』

『SEX 暴力 死ぬ 恐怖 オレの頭の中でリンクしてしまう
トラウマからくるパニック障害だって診断された あの時から声も出なくなっただ オレは普通に恋愛できない』

『発作がひどくなると 呼吸できなくなる 何してるかわからなくなっただ あばれて 相手にケガさせたこともある 自分がいやで 何度も死のうとしたけどダメだった 体のヤケドのアト見ると 昔のこと思い出す それでまた死にたくなる オレはもう壊れてる』

『ミユキはオレのこと知らないから 好きだっただ言える でも そのうち絶対イヤになる オレはミユキの期待にそえないし 普通じゃない いつ発作がきて たおれるか分からない 自殺してしまう』

かもしれない』

彼の心の内を吐き出すような激しい文章に、あたしは絶句する。言いたい事だけを書き殴っていく文章は、少しの嘘も込められていない。

そこまで目を通して、あたしは準一を見つめた。

絶望的な彼の瞳に涙が浮かんでいる。

傷ついた少年みたいな準一を抱き締めてあげたかった。

でも、彼を傷付けたのは、紛れも無くこのあたしだった。

思わず、触れようとしたあたしの手を彼はパン！と振り払った。

『ミユキはどうしてそんなことしてた？ オレは好きでもない相手とするのは 死ぬほどいやだった どうして遊びでそんなことができる？ 金欲しさでないなら オレには理解できない』

彼の言葉はあたしの胸に突き刺さった。

裏切られた彼の黒い瞳は、潤んで強い怒りの火が灯っている。

もう弁解できる余地は残されていなかった。

普通の男の子だったら、「もうすんなよ、バーカ」で済んだ話だったかもしれない。

準一は汚れたあたしを受け入れるには、純粹で傷つき過ぎていた。

「・・・ごめんなさいって、言ってもしょうがないね。あたしの事もうキライになった？」

小さな声で問いかけたあたしから、彼は目を逸らした。

それが彼の正直な気持ちだ。

あたしは心臓がギュッと掴まれるような息苦しさを感じた。

『分からない ミユキのせいじゃないけど オレは君を抱けない
それがつらいし 君はそれがイヤになる オレも君をうけいれられ
るのか 自信がない いいたくないけど 今でもオレは母をゆるせ
ない』

唇を噛み締めて、準一は辛そうな表情であたしを見た。

彼が言いたいことはよく分かったし、バレたらこういう結末になる
事は予想していた。

トラウマの一因になってる彼の母とあたしは似過ぎてて、下手をす
ると、あたしが彼のパニック発作の引き金になってしまいかもしれ
ない。

純粋な彼の恋人になるには、あたしは汚れ過ぎている。

そんな事は分かった。

・・・分かってたけど。

あたしの頬に涙が再びポロポロと零れ出した。

二人で一緒にいた短い日々があまりに穏やかで、もしかしたら、何
も云わずにずっと一緒にいられるんじゃないかって、錯覚してしま
っていたんだ。

中学校の時に別れてからの空白の8年間は、あたし達をあの頃には
戻れないくらいに変えてしまっていた。

最初からあの頃に戻るなんて無理だったのかもしれない。
汚いものの上に蓋をして、気が付かないフリをしたまま、その上で
平穩に暮らそうなんて虫が良過ぎた。

「・・・いいよ。分かった。あたし達、やっぱり無理だね。今まで
ありがとう。もう会わないから、安心して。体に気をつけてね。」

涙を拭きながら、あたしははだけたジャージの胸元を閉めた。立ち上がって、途中まで引き摺り下ろされてるズボンをお腹までグイッと引っ張り上げる。

さっきまで忘れていた寒さが突然襲ってきた。

彼の心が離れてしまったその隙間に、風が吹き込んできたみたいに。ノロノロと立ち上がって、来た時に持ってきたスポーツバッグを手にとった。

職場の制服の中に突っ込んでジッパーを閉めると、他にすることは何もなくなった。

後は潔くここから出て行くだけ。

準一は黙ってあたしの行動を観察していたが、本気で出て行くつもりなのだと分かったと、少し顔を曇らせてペンを回した。

『出て行って どこにいくの？ 家に帰る？』

「大丈夫。準一は何も心配しないで。それより自分の事、大事にしてね。準一は何も悪くないんだから。きっと治るから、自殺なんて絶対しちゃダメだよ。」

無理矢理作った白々しい笑顔。

半泣きで、声は震えていたけど、あたしは何とか饞別の言葉を口にしました。

準一は少し躊躇うように視線を泳がせたが、やがて唇を噛んで俯いた。

それでいい。

傷ついた準一の心を癒してくれる女の子は、あたしじゃダメなんだ。

「準一、元気だね。中学校の時、助けてくれて嬉しかった。この一週間楽しかった。さよなら！」

あたしは狭い玄関のドアを押し開け、マンションから飛び出した。

迷子 1

フラフラとマンションの階段を降りて、あたしの車を路上駐車している川に向かった。
遮る建物がない川縁は、冷たい強風が容赦なく吹き付けてくる。寒さにガタガタと震えがくる体をあたしは両腕で抱き締めるようにして歩いた。

車に入ってエンジンをかけてみる。

エンジンがかかる音は、彼のマンションにも聞こえる筈だ。もしかしたら、この音を聞いて彼が追いかけてきてくれるかも・・・なんて一縷の希望を持ってあたしは車の中でしたらしく待機していた。だが、5分経っても追い縋って来る人影は見えなかった。

・・・バカみたい。

往生際悪過ぎだし。

あたしは泣きながら一人で笑った。

こんなトコ誰かに見られたらカツコ悪過ぎる。

彼と再会してから、たった一週間。

同棲していた分、接近するのも早かったとは言え、こんなにあたしの心が彼で一杯になってしまっうなんて。

今、ぽっかりと開いてしまったその穴を塞ぐ術は、あたしには見つける事ができそうになかった。

後ろ髪を引かれる思いを断ち切るように、あたしはサイドブレーキを思い切り踏みつけた。

涙でぼやける視界に、あたしは腕でゴシゴシと顔を拭きながらハンドルを切った。

とにかく彼の元から消えなくては。

あたしの頭にまずそのことが浮かんだ。

彼の話を聞けば聞くほど、あたしが彼の発作の原因になりそうな気がしたからだ。

でも、帰る先などなかったあたしには、それは衝動的過ぎる行動だった。

・・・どーしてあたしって、こう、行き当たりばったりなんだろう。

行き先もないまま車を転がして、あたしは一人毒づいた。

さつきからすごい寒気と頭痛がしている。

この寒さの中、噴水の中にダイブしたんだから風邪を引いたとしても不思議はない。

目的もなく街中をウロウロとドライブするのにも疲れてきて、眩暈がする。

本格的に熱が出てきたのを感じて、あたしは目についた国道沿いのファミリーレストランの駐車場に車を入れた。

寒さで風邪を引いたか、別れのショックで知恵熱が出たのか。

酷くなってきた眩暈に視界が揺らいできたのに、あたしは吐き気を感じた。

寒い・・・！

体の芯からくる震えが止まらない。
熱の時に起こる関節痛が始まっていて、あたしは自分が完全に病気になることを自覚する。

力の限り手を伸ばして、後部座席に突っ込んだスポーツバッグの取っ手を引っ張り寄せる。

そのポケットに確か、ヤツのケータイ番号を入れた筈だ。
失くしてなければ。

祈るような気分でポケットに手をつ突っ込むと、一週間前と同じ状態で兄貴の博史の名刺が入っていた。
強がりを言ってる余裕も無くなって、あたしは震える手でケータイの番号を押した。

・・・お願い、出て・・・。

目を閉じて、祈るようにコール音を聞いた。

「・・・もしもし？林ですが？」

聞き慣れた低い声。

その声に、思わずホっとして力が抜けた。

「・・・博史？あたし・・・。」

「美由紀か？結構、頑張ったじゃん。すぐに電話してくるかと思ったのに。もうギブアップか？」

あたしが死にそうになってとは思わない博史は、ハハハと高笑いした。

ホーラ、見る！と言わんばかりだ。

鬱陶しいけど、今のあたしには彼しか頼れる人がいなかった。

「で、どーした？どこで迷子になってんだよ？」

「・・・博史、寒い。助けて・・・。」

「美由紀？どうした？お前、どこにいるんだ？何かあったのか？」

あたしが蚊の泣くような声に、彼はやっと尋常でない事態を理解した。

・・・結局、迷惑かけてる。

威勢良く啖呵切って飛び出してきたくせに、あたしは誰かに頼るしかない。

文句ばかり言ってるくせに、一人で何もできないただの子供だ。情けなくて、悔しくて、涙がポロポロと溢れてくる。

そこにイライラした博史の怒鳴り声がケータイから響いてきた。

「おい！美由紀！？どこにいるんだ？泣いてないで返事しろ！」

「・・・駅から国道入ったとこのファミレスの駐車場・・・。あたし、熱があるみたい。動けないの。」

「分かった。動くな。誰かと一緒なのか？」

「・・・ううん、一人。迷惑かけてゴメン。助けて・・・。」

「分かった。すぐ行くから、そのままそこにいろ。エンジンかけとけよ。」

博史の低い声は頼もしくて、あたしは安堵して目を閉じた。

後で、ちゃんと謝ろう。

博史にも、できれば準一にも。

・・・会ってくれたらの話しだけ。

あたしの脳裏にこの一週間の事が走馬灯のように浮かんでくる……
そして意識を手放したあたしは、そのまま何も分からなくなった。

体を持ち上げようとしている二本の太い腕に、あたしは起こされた。重い瞼を薄く開けて見ると、博史が狭い運転席から必死であたしを助手席に押し出そうとしている。

あたしが目を開けたのに気が付いて、博史はホツとした顔で笑った。

「マジですげえ熱だな。このまま病院行くぞ。お前、起きてんなら助手席行けよ。俺がこの車で運転してくから。」

「……うん。来てくれてありがとう、博史。あたしね……。」

「後で聞くよ。オラ、もつと動け。」

照れ臭いのか、少し乱暴にあたしの肩をグイグイと押し退ける。

助手席にあたしを追いやると、博史は自分が来ていたダウンジャケットを脱いで毛布代わりにあたしに被せた。

彼の体温が残ってるジャケットは温かくて心地良かった。

博史が運転席に座ると同時に車は滑り出し、勢いよく国道に飛び出した。

迷子 2

再び眠りに落ちたあたしが目を覚ました時、そこは病院だった。

真っ白な天井に、パーテーション代わりに白いカーテンに囲まれた小さなベッド。

頭の上からぶら下っている透明の液体が、チューブを通って、あたしの腕に注入されている。

どうやら、点滴を打たれているらしい。

足元を見ると、折り畳みのパイプ椅子に腰掛けてまま、変な姿勢で眠りこけている博史の姿があった。

カーテンの外では看護婦さんと思しき女性達の声と、バタバタ歩き回る足音がひっきりなしに続いている。

救急外来に連れて来られたようだ。

考えたら今は土曜の夜で、普通の病院では診て貰えなかった筈だ。

博史は疲れて口を半開きにしたまま、時々カクンカクンと揺れながら眠っている。

あたしは柄にもなく感謝の気持ちを持って見つめた。

「・・・博史、起きて。」

小さな声であたしが呼ぶと、彼の体が一瞬、ビクンと揺れた。

ガバッと反射的に立ち上がると、博史は体を起こしたあたしに気が付き、表情を緩める。

「大丈夫か？今、点滴やってるからもう少し寝てる。医者が言うにはインフルエンザじゃないそうだ。前から体調悪かったのか？」

「ううん。今日噴水で水浴びしたから、それで多分……。」
「は？噴水で水浴び！？」

あたしの言葉に博史は眉を寄せた。

説明するには話が長くなりそうなので、あたしはまたベッドに体を横たえた。

博史は椅子を持って、あたしの顔が見えるところまで移動して座った。

「言いたくないなら聞かねえけど、今までどこにいたんだよ？男のどこか？」

「……うん、まあ。そんなとこ。嫌われちゃったけど。」

責める風でもない彼の口調に、あたしも案外素直に返事をした。

博史はあたしが真つ当に返事したので、もう少し突っ込んだ。

「彼氏か？別れて追い出されてきたワケ？」

「……まあ、そんなとこ。もう会えないの。」

そう言った途端に準一の顔が浮かんできて、あたしの目頭が熱くなつた。

泣き顔を見られたくなくて、慌てて掛け布団を引つ張り上げたけど、博史には気付かれてしまった。

慰めてくれるつもりなのか、彼にしては珍しく優しい口調で、布団の上から話しかけてくれる。

「ま、そんな事もあるさ。点滴終わったら家に帰ろう。ツツパるのもそろそろ潮時じゃね？」

「……あたし、サイテーだね。バカみたい。一人じゃ何もできなかった。お父さんに迷惑かけて、博史に迷惑かけて、準一を傷付け

て……。子供みたいに皆を振り回しただけだった。」

準一？と博史は一瞬、首を傾げたが、彼の名前だと察したのか突っ込んでこなかった。

「……いいんじゃない？自分が子供だって悟っただけでも、この一週間は有意義だったな。ま、お前だけじゃなく、俺も含めて誰でも子供なんだよ。一人じゃ生きていけないんだから。だからこそ、家族はお互い助け合うべきだと、俺は思うわけ。」

優等生らしい博史の説教は、不思議とあたしの頭に入ってきた。

自分が一旦、家を出たら、ご飯もまともに作れない事実を身を持って経験してしまった。

あたしには守ってもらえる家族がいて、帰るべき家がある。当たり前だと思っていたその事実が、実はとてつもなく貴重で神に感謝するべき事だって思い知った。

……何故って。

守ってもらえる筈の親から酷い事されて、帰る場所もなく、一人で生きていかなければならない人もいるんだから。

準一のヤケドだらけの細い体が目に浮かんだ。

あたしはどれだけ恵まれて、ぬるま湯の中でのうのうと生きていたんだろう。

帰るべき場所も、守ってくれる人もいない準一の境遇を思えば、あたしは幸せ者だったんだ。

できる事なら。

あたしが、彼を守ってあげたかった。

でも、それはできない。

準一はもう、あたしを受け入れる事はできないだろう。

ギョッと瞑った両目から涙がポロポロ溢れてきて、あたしは顔を覆った。

声を殺してしゃくり上げるあたしの頭に博史の温かい手がポンと置かれる。

その手があたしの髪をクシャッと撫でてから、低い声がした。

「・・・まだ寝てるよ。俺、一服してくるから。点滴終わったら帰るからな。父さんの事は心配するな。」

・・・ありがとう、博史。

自分のふがいなさや情けなさを、そして大事な人を傷つけ失ってしまった事に、あたしはひたすら泣き続けた。

失踪 1

あたしが自宅に出戻ってきてから、3週間が過ぎた。

気が付けば、今日は25日でクリスマス。

実家に戻ってからの3週間、あたしは一度も準一と会おうとしなかった。

勿論、会いたかった。

でも、最後にあたしを見た時の準一の裏切られた子供の様な視線が忘れられなかった。

怖かったのだ。

彼に嫌われる事より、あたしの存在が彼を更に傷付ける事が。

あの日から、あたしは若干生活態度を改め、最低限の家庭のルールは乱さないように生活を続けていた。

理由は、まず、兄貴の博史に頭が上がらなくなってしまった事。

優等生で堅物だとバカにしてた博史は、案外、物分りが良くて、あたしのだらしなさも知った上で色々と相談に乗ってくれた。

兄貴とまともな会話する日があるなんて思ってもみなかった。

準一の事については話さなかったけど、辛い別れがあった事は察してくれて、無理に聞いたりしなかった。

「次にいいヤツできたら紹介しろよ。俺が査定してやるから。」

そう言って、博史は笑った。

あたしがいなかった空白の一週間の事を無理に詮索しようとはしなかった。

あたしはそれを彼なりの愛情だと受け止めた。

大人しくしてるもう一つの理由は、父親に迷惑をかけてしまった事。例の怪メールはやはり、役員名簿を入手した何者かによって、無差別に送られてきたものだとは判明した。

もちろん確信はないが、メールを受信したメンバーの顔ぶれからそう考えるのが自然なようだ。

問題は真偽の有無に拘らず、役員の中にそういう娘がいるという噂が社内にも広まってしまったことだった。

最後まであたしを信じてくれてた父は必死で否定はしたらしいが、会社で非常に肩身狭い思いをしていたのだと、博史は言った。

さぞかし怒っていることだろうと、また殴られる事は覚悟していたが、父親は博史に担がれて戻ってきた時、何も言わなかった。

後日、殊勝にも頭を下げるにいったあたしに、父は一言「自分を大事にしなさい」とだけ言った。

あたしは父親が会社で恥をかいたことより、あたしの事を心配して怒っていた事にやっと気が付いた。

「・・・ごめんなさい」

あたしも一言だけ、父親の背中に向かって言ってみた。

その背中は振り向きもしなかったが、それが照れ隠しだって事は見て分かった。

クリスマスイブは久し振りに家族全員が集まった。

公務員で滅多に残業なんかしてこない博史はともかく、父親が皆と一緒に夕食を食べれる時間に帰って来るなんて何年振りかの事だった。

母親も何気に嬉しそうで、街で人気のお店のクリスマスケーキを、わざわざ予約して買ってきて子供のようににはしゃいでいた。

家族4人水入らずでのクリスマスディナー。

鶏の唐揚げやポテトフライなんかを摘みながら、そろそろ宴も酣になつてきた頃、博史が突然立ち上がってワザとらしく咳払いをした。

「えー、皆さん。何年か振りに一同集まりました今宵、私、林博史は重大な発表をさせて戴きたいと思えます。」
芝居がかつたその口上に、一同失笑した。

「何言つてんの、博史。もう酔つてんの？隠し芸でもするつもり？」
「ちげーよ、バカ！」

茶化して野次を飛ばすあたしに、博史は真っ赤になって反撃する。

「じゃ、何なの？」
「あー、その、俺、来年の春、結婚しようと思うんだ。だから、年が明けたらこの家を出るよ。今、彼女と一緒に新居探してるんだ、実は。」

頭を掻きながら、耳まで真っ赤になって、博史は歯切れ悪く言った。あたしと両親は、立ち上がっている博史をポカンとして見上げるしかない。

博史に女がいた!?

正に寝耳に水だったあたし達は、思わず顔を見合わせる。

「何それ？ずっと隠して付き合ってたの？」

「別に隠してねえだろ。誰も聞いてこなかっただけで。俺だって彼女くらいいるっつーの。だから・・・」

博史は急に真面目な顔になって、啞然としている父親と母親の方向を向けた。

そして突然、ガバッと頭を下げると堂々と独立宣言を始めた。

「今までありがとうございました！俺、これから自立して彼女と暮らします。年が明けたら、紹介しに改めて連れてきます。会ってくれるよね？」

突然のカミングアウトに、流れについていけない両親はただ顔を見合わせている。

なかなか確信犯だ。

優等生の博史らしい強引且つ、確実なやり方。

もちろん、この状況で二人ともノーとは言えまい。

兄貴、カッコよすぎる！

バラサイト博史の人生最大の爆弾発言に、あたしは泣き笑いで盛大な拍手を送った。

平和なクリスマスの夜だった。

博史の人生最大の独立宣言に一同動揺した後、声援を送り、宴は終

了した。

母親が後片付けを始め、する事がなくなった父親は風呂に入り部屋を出て行った。

後に残ったあたしと博史は、つけっ放しだったテレビの前のソファで食後のコーヒーを楽しんでいた。

ぼんやりと液晶画面を見つめていたら、9時のニュースが始まって、あたしは何気に見てしまう。

いつもはニュースなんて興味もないのに、この時は不思議とアナウンサーの音が耳に響いてきた。

『・・・リーマンショック後、売り上げを右肩下がりに落としていた自動車産業を中心とする愛知県内の製造業社は、年末までに期間工、派遣社員を一斉解雇の踏み切ると見られています。

製造業に従事する非正規労働者は3万人を越えるとも予想され、雇用保険や社会保険等のない失業者の今後の社会保障と派遣業を中心にした雇用形態の在り方が課題になりそうです。・・・』

・・・期間工の一斉解雇？

頭の悪いあたしにも、その言葉は理解できた。

派遣会社の借り上げたマンスリーマンションで、契約満了までしかいられないと言っていた準一の顔が、咄嗟に脳裏に浮かんだ。

「民間企業は大変だな。俺、公務員で良かったよ。もし派遣社員だったら、突然解雇で年末ホームレスだな。」

準一の事を知らない博史は、ニュースを見ながら人事のように軽く言った。

確かに博史にとっては人事だろう。でも、あたしは追い討ちをかける様な博史の何気ない言葉に、心臓がギョツと掴まれるような気がした。

「何それ？突然解雇されるの？」

「・・・お前、新聞くらい読めよ。今、すげー景気悪いんだよ。市役所にも今月になってアパート追い出された派遣社員が生活保護の申請にゴマンと押し掛けてるって、同期のヤツが言ってた。企業は年末まで仕事させてから解雇する気らしいから、クリスマス終わってた明日からがピークじゃね？」

ホントに何にも知らなかったあたしを見て、博史はバカにしたように説明した。

新聞どころかテレビも見てないあたしには、世の中の情勢なんか知る由もない。

ウチの会社は派遣を入れてなかったので、準一以外に製造業に携わる人と接点がなかった。

「・・・やつぱり解雇されたら、アパート追い出されちゃうの？」

「そりゃ、そーだろ。社員の最後の給料だつて出せるか分かんないんだから。派遣会社の物件だったら、まず賃貸契約を解消するよ。経費を最小限に抑える為には、出てつて貰わなきゃ。でも、これだけ一斉に追い出されたら、自治体で対応できるのかなあ・・・。」

人の気もしらないで、博史は恐ろしい持論を一人で展開している。あたしは、とてつもない胸騒ぎを感じていた。

失踪 2

なんだかんだと言っても、あたしは恵まれていた。

しがないOLでも一応正社員で、健康保険なんかの福利厚生面は保障されていたし、言われた事だけこなしていれば解雇の心配はなかった。

でも、それは今までの話だ。

博史の話聞いてから恐ろしくなったあたしは、翌朝、出勤前に新聞を広げてみた。

今まで目に留めたこともない経済面や社会面には、この年末に起こるだろう派遣切りの記事で埋め尽くされている。

典型的な期間工だった準一が、この全国的な解雇の波から除外されているとは思えなかった。

嫌な予感が昨日からずっとしていた。

あたしはいてもたってもいられず、朝食も食べずに家を飛び出した。出勤時間は9時なのでまだ余裕はあった。

あたしは車を準一の住んでいたマンションに向かって走らせる。

この時間だったら、もう出勤している頃だ。

まだ働いていければの話だけど。

会えるとは思ってないけど、いなくなったら何らかの痕跡は見つかるだろう。

クリスマスが終わった翌日は、一気に年末モードだ。

心なしか交通量の少ない国道を、あたしはひた走る。

ウチみたいなき細企業は28日まで働かされるけど、大手メーカー

は今日から冬休みに入っているところもある。
それが証拠に重役の父親は、今日から大型連休に突入していた。

だったら、準一の会社は？

もしかして、昨日で解雇されてたら・・・？

胸騒ぎがした。

もう会えなかったら、あたしは一生後悔する。

中学校の時みたいないな引き裂かれ方はもう嫌だ。

とにかく、彼に会いたかった。

彼があたしを許してくれなくても、あたしは彼を愛してる。

アイシテル！？

初めて自覚した準一への思いに、我ながら八つとした。

・・・あたしは彼を愛してる。

そう思った途端に、胸の奥からジワつとした温かい感情が湧き上がる。

彼の優しい黒い瞳、傷だらけの細い体、骨ばった大きな手、照れた
ようないつもの笑顔・・・。

失いたくなかった。

だから、絶対に会わなければ。

たとえ、これが最後になつたとしても。

あたしは懐かしい彼のマンションに向かって、アクセルを踏み続けた。

川べりの白いマンスリーマンションは、飛び出してきたあの日と変わらない姿でそこに建っていた。勝手知ったるあたしは、川べりに車を路上駐車してから、マンションに向かう。

爽やかな冬の朝の風が、あたしの髪をなびかせていく。あの時と変わらない平和な朝に思われた。

マンションの階段を駆け上がって、二階の彼の部屋に向かって通路を進んでいく。

ドアの前で立ち尽くしたあたしの耳に妙な物音が聞こえてきた。ガタンゴトンという大きな音に混じって、ガー・・・という掃除機のような電気音。

まさか、こんな時間に？

準一がそこで掃除をしているとしたら、本当に会社は休みに入っているのだろうか。

もしくは、仕事自体が終了してしまったか・・・。

あたしは思い切って、ドアノブに手をかけ思いっきり開いた。その途端に、大音量の掃除機の音が耳に入ってくる。

懐かしいキッチンには、大きなダンボールがドンと通路を塞いで置いてあり、その中には無造作に放り込まれたフライパンや食器が見えた。

誰が見ても、それは引越しの準備だった。

「準一！いるの？」

いきなり突入するのも憚られて、あたしは玄関で靴も脱がずに大声で呼びかけてみた。

すると、あたしの声に気付いたらしく掃除機の音は止み、中から3

0代半ばくらいのOL制服姿の女性が顔を出した。

突然の女性の出現だったが、その女性の典型的な営業職の雰囲気とイマイチ垢抜けのない普通の容貌のせいで、準一の恋人だという認識は全く浮かんでこなかった。

女性は「何だ、この女は!？」と言わんばかりに、あたしを睨みつける。

若い女の品定めをするような目つきは、まるで姑だ。

一瞬、怯んでしまったが、あたしは負けずに睨み返してから女性に問いかけた。

あたしだって現役OLだ。

お局の扱い方は慣れている。

「あの、ここ、本田準一って人が住んでた筈なんですけど、ここで何してるんですか?」

あたしの問いかけに、女性は一瞬、はあ?という表情をしたが、やがて面倒臭そうに返事をした。

「私は、マンション返す為に掃除に来た派遣会社のスタッフです。

ここ、ウチの派遣会社で借り上げてた部屋なんですよ。ウチから派遣してた社員が一斉解雇されたので、今月一杯でマンションの賃貸契約解消しなければなくなっただけなんです。

解雇通知が出たのが2週間前で、今月までで仕事終了なんだから企業も強引ですよ。勿論、今月一杯までは猶予与えてましたよ。でも、本田さんの生産ラインは先週で仕事無くなっちゃったから、次の職場を探したいって昨日出て行っただけです。」

昨日出て行っただけ!?

間に合わなかったんだ・・・!

頭を殴られたような衝撃を感じて、愕然としたあたしはただそこに立ち尽くしていた。

女性は言い訳がましく、全ては突然解雇に踏み切った企業のせいだとブツブツ言いながら説明してくれた。

今回の解雇は全国的で、製造業が主なこの地域では会社の賃貸マンションを追い出される派遣社員がそれこそゴマンといるそうだ。当然の事ながら、準一もゴマンの中の一人に含まれてしまって、少しでも早く次の職場を探そうと年末を待たずに出て行ったらしい。

「今出て行っても、年明けに出て行っても状況は変わらないって言ったんですよ。どうせ、年末は企業も休みで稼動してないんだからでも、本田さんはここで待ってるよりは、少しでも早く次を探したって。次の職場なんて、景気が良くなるまでないと思うんですけどねえ。」

「……ところであなた、ひよっとしたら林美由紀さん？」

突然、知る筈のないあたしの名前が女性の口から飛び出して、あたしは驚いて顔を上げた。

「やっぱり、そうか。丁度良かった。」

そう言いながら、女性は部屋の奥に入ると大きめの紙袋を引っ張ってきた。

紙袋はガムテープでしっかり封がしてあり、宅急便で郵送する為に送り状まで貼り付けてある。

見覚えのある字で書かれたその宛名は、間違いなくあたし、林美由紀宛だった。

「本田さんに、部屋の片付け終わったら宅急便で送ってくれって頼

まれたの。送ると送料掛かるしコンビニまで持っていくの面倒だから、
ここで受け取ってくれます？送料はあなたに返しますから。あなた、
彼女？」

女性は紙袋と2千円をあたしに手渡し、悪戯っぽく笑った。

失踪 3

彼は昨日ここから出て行った。

その事実が分かれば、ここにいる理由はもうない。

派遣会社のスタッフだという女性にペコッと頭を下げ、紙袋を抱き締めて部屋を後にした。

彼が昨日まで触って梱包していただろう紙袋は、まだ彼の温かさが残っているような気がした。

川べりに駐車していた車の中に入って、あたしは封を開けるのももどかしく、紙袋の口を力任せに破った。

中に入っていたもの。

それは、噴水にダイブしたあたしが彼の部屋で洗濯機に放り込んだジャケットとその日に着ていた衣服一式だった。

クリーニングはしてないけど、彼らしくキチンと畳まれて入っていた衣服からは、柔軟材の匂いがフワンとした。

そのジャケットの下に茶封筒が挟まっているのに気が付き、あたしの胸はドキンと鳴る。

『美由紀へ』と書かれたその封筒をあたしはもつれる指で強引に開いた。

その中には白い便箋。

いつもの殴り書きとは別人みたいな達筆で文が綴られている。

姿勢を正して、手紙を書く彼の姿が目に見えかんだ。

逸る胸の鼓動を抑えつつ、あたしは便箋に目を走らせる。

『美由紀へ』

元気ですか？

中学校の時の名簿から住所が分かったので、君の服、郵送します。

この荷物が君の家に届く頃、僕はもうあのマンションにはいません。

君が出て行ってから1週間後、僕ら派遣社員は一斉解雇の通知を受けました。

美由紀には言いませんでしたが、生産は目に見えて減っていて、解雇される予感は以前からありました。

就労契約では今月末まで雇用されますが、今の時点で今年の仕事はもう終了しているので、僕は少し早いですが退職を申し出ました。

景気が悪いのでどうなるか分かりませんが、ここにいっても仕方がない事は分かったので。

企業が年末の休みに入る前に、次の職場を決めたいと思います。

美由紀には悪い事をしたって、後悔しています。

君なら僕の事を分かった上で受け入れてくれると思ったので、甘えていました。

君の事は受け止められなかったのに、勝手な人間だと自覚しています。

あの夜、僕が駅前に行こうなんて言い出さなければ、今でも二人で穏やかに暮らしていたのかな。

クリスマスも一緒に過ごせただろうに、なんて今更ですが残念に思

います。

僕は結局、トラウマを抱えたただの子供で、自分の事を美由紀に曝け出して押し付けるばかりで、君の事を受け入れる準備は何もできていませんでした。

君にも抱えてる悩みはあったらうに、何も聞いてあげられなかった。

それが一番の後悔です。

僕は喋れないというハンデを持っているので、次の仕事を見つけるのは恐らく困難を極めるかと思っています。

よって、仕事が見つければ、そこに移動しなければなりません。

美由紀と会う事はもうないと思います。

偶然マクドナルドで再会してから僅か1週間ですが、美由紀と一緒にいた時間は幸せでした。

中学校を辞めた時、君と別れる事だけが辛かった。

だから、今回再会して、少しの間でも一緒に暮らしたのは奇跡だし、これで思い残す事はありません。

ありがとう。

美由紀も頑張って、幸せになって下さい。

キチンとした彼の綺麗な文字が涙でぼやけて見えなくなっていく。読み終わったあたしは、手紙を握り締めて、ハンドルに突っ伏した。

違うよ、準一。

準一は悪くないよ。

あたしが今までバカ過ぎたんだ。

準一がそんな風に自分を責める必要なんて何にもないんだよ……。

どこまでも優しい準一。

彼はどんなにか、自分を責めてここから出て行っただろう。

当てのない出発はどんなに心細かったあろう。

あたしの脳裏に浮かんだのは、何故か中学生のまだ女の子みたいな彼の姿だった。

彼に逢いたい。

もう一度出逢えたら、あたしはもう彼を絶対に離さない。

傷ついた体で迷子になってる準一を、あたしは早く見つけてあげなくちゃ……！

腕でゴシゴシと涙を拭いてから、車のドアをバン！と開け、再びマンションに向かって今来た道を走り出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1427y/>

ロスト・チルドレン

2011年12月11日21時53分発行